

早期秦文化の起源と形成

梁 雲（西北大学）

1. 序言

早期秦文化とは、西周から春秋前期まで、あるいは紀元前 677 年に秦徳公が雍城に遷都する前の秦文化を指す。秦文化の多くの特徴はこの時期に形成され、後世に大きな影響を与えた。

秦文化の起源問題は、1930 年代から今に至るまで人々の関心を集め、すでに 80 年の研究の歴史がある。現在までに発見されている考古資料から見ると、早期秦文化はおおむね前・後の 2 つの発展段階に分けられ、前者は主に西周中期で甘肅省清水県李崖遺跡に代表され、その遺構・遺物は李崖型と呼ばれる。後者は西周後期から春秋前期で、甘肅省礼県西山坪・大堡子山・甘谷県毛家坪および関中西部の春秋前期のいくつかの遺跡が該当し、その遺構・遺物は西山型と呼ばれる（梁 2014）。早期秦文化は李崖型から西山型へと変化する。秦文化をひとつの考古学文化として扱うならば、その早期の遺構・遺物の文化構成には主として 3 つの起源があることがわかる。それは殷文化、周文化、そして西戎文化である。

2. 殷文化の要素

『史記』秦本記によると、秦の祖先と殷は密接に関係しており、そのため周代秦文化は一側面において濃厚な殷文化の遺風を留めることになった。

（1）腰坑および犬を殉葬する風習

春秋から戦国までの秦墓では、等級が高ければ高いほど、腰坑を有し、犬を殉葬する割合が高くなる。統計では、1～3 点の銅鼎が出土する士級の墓のうち、腰坑があるものは 11.8%、犬の殉葬があるものは 14.7% を占める。5～7 点の銅鼎が出土する大夫級の墓のうち、腰坑と犬の殉葬があるものは 44.4% を占める（梁 2008）。礼県大堡子山 M2 号墓・M3 号墓のような秦公大墓では、すべてに腰坑が設けられており、坑内には犬の殉葬がいずれも 1 件、黄玉琮が 1 点ある。西周時代の秦墓の腰坑では、犬を殉葬する風習が一層盛

んである。礼県西山坪の4基の西周時代秦墓のうち3基に腰坑・犬の殉葬があり、清水県李崖で発掘された20基の西周墓のうち、19基に腰坑・犬の殉葬がみられるように、多くの墓の埋土中に犬の殉葬が見られる（趙化2012）。周知のとおり、殷系墓では腰坑・犬の殉葬が流行し、殷王陵を除いて、安陽市大司空村では6割以上（馬ほか1955）、殷墟西区では約半分の殷墓に腰坑が設けられ（中国社会科学院考古研究所安陽工作隊1979）、「殷墓で最も数量が多いのは犬で、犬が埋葬されている殷墓は、殷墓の総数の約3分の1を占める」という（黄1983）。対して、西周期の周人墓が腰坑を伴うことはまれであり、犬の殉葬の割合は比較的少ない。甘粛・青海地区の土着の古文化の墓には腰坑・犬の殉葬の報告が見られないため、秦墓にみられるこの種の習俗は明らかに殷文化に由来するものである。

犬の殉葬と関係する犬祭もまた秦文化の伝統の一つである。『史記』秦本記に「（徳公）二年、初めて伏す。狗を以て蠱を禦ぐ」とある（訳註1）。『史記集解』は徐広の「年表に云う「初めて伏を作り、社を祠り、狗を邑の門に磔す」と」を引用している。1980年陝西省鳳翔県大辛村で発掘された2つの春秋時代の祭祀坑は、円袋状を呈しており、底部には草木灰と焼土が散乱しており、坑内の動物犠牲骨は4層に分けられる。全部で羊が15体、犬が11体、豚が7体出土しており、完全な動物骨のうち、3体分が犬の骨であった（雍城考古隊1985）。大辛村は秦都雍城の西郊外に位置し、北側に沿って雍河が流れている。祭祀坑は雍城西城壁の南から2番目の門に向かいあって位置しており、発掘の結果によると、この門の幅は10mで、道路は東に向かって、城内の姚家岡宮殿区まで延びていた。この2つの坑は、おそらく磔狗禳祭の痕跡であろう。秦の邑門の磔狗の風習は殷人から踏襲しているはずである。殷墟の卜辞には犬祭の記事がたびたび見られ（肖1995）、鄭州と殷墟の建築址でも、犬祭の痕跡がよく見られる。

（2）殉葬および人身犠牲の習俗

紀元前621年秦の穆公は雍城に葬られ、当時の良き臣下であった奄息・仲行・針虎を含めた177人が殉葬された。秦の民は悲しみ、「黄鳥」の詩を作った。鳳翔県秦公1号大墓の槨室外の二層台には、166人の殉葬者が並べられ、そのうち「箱殉」が72人、「匣殉」が94人で、一部の殉葬者の棺槨の蓋板上には、まだ朱砂で書かれた文字・番号が残っており、当時の等級制度が厳格で、埋葬時の順序が整然としていたことを表している。大墓の被葬者は秦の景公である。文献と考古資料を照らし合わせると、秦公大墓に殉葬された臣下の数を知ることができる。春秋時代の秦の高等級の青銅器副葬墓でもまた人を殉葬することが流行し、現在発掘されている5～7点の鼎を伴う大夫級の墓では、6割以上が殉葬者を伴っており、殉葬者はいずれも3～7人である。『史記』秦本紀に「…武公卒す。

雍の平陽に葬る。初めて人を以て死に従はしむ。死に従ふ者六十六人」とある。実際には、秦の殉葬習俗の開始はこれよりもずっと早かったことになり、礼県大堡子山 M2 号墓の二層台には漆棺を伴う殉葬者が 7 人、西墓道の埋土中には 12 人、合計 19 人が埋葬されている。M3 号墓の東・南の二層台は盗掘されているが、北の二層台には 1 人、西の墓道の埋土内に 7 人が殉葬されていた（甘肅省文物考古研究所 2000）。西周時代の秦墓でもすでに殉葬者が見られ、礼県西山坪の 4 基の西周墓のうち、3 基は殉葬者を伴っており、その中で M2003 号墓は銅鼎を 3 つ副葬する墓で、その南北の壁龕にはそれぞれ 1 人殉葬者が埋葬されている。このことから秦の高級貴族の間では殉葬の習俗が長期にわたって踏襲されているということがわかる。

『史記』秦本紀では秦晋韓の戦いについて語られており、「是に於て、繆公、晋君をにして以て帰る。國に令す。齋宿せよ。吾、将に晋君を以て上帝を祠らんとす、と」とある。その後、周の天子と繆公夫人が許しを請うたことにより、晋の恵公は赦免された。この記載は秦国の祭祀に人身犠牲が用いられたことを表している。秦の宗廟祭祀にもまた人身犠牲が用いられ、秦の雍城馬家荘の宗廟で発見された 181 基の祭祀坑のうち、人骨を伴うものは 8 基、人骨と羊の骨を伴うものは 1 基である（陝西省雍城考古隊 1985a）。2006 年大堡子山の樂器坑周辺で発掘された人身犠牲坑 4 基（K1～K4 号坑）では、坑内から 1 体ないし 2 体の人骨が出土しており、すべて屈葬の状態であり、多くは子供で、大人は 1 体だけであった。これらの人身犠牲坑は、樂器坑を囲むように分布しており、そのうち 1 号坑は樂器坑を僅かに壊して掘られていることから、当時はまず樂器を埋めた後に、さらに人身供犠を行なったことを表している（早期秦文化連合考古隊 2008）。樂器坑と人身犠牲坑は M2 号大墓の西南約 20 m に位置し、墓祭遺構に属すると考えられる。

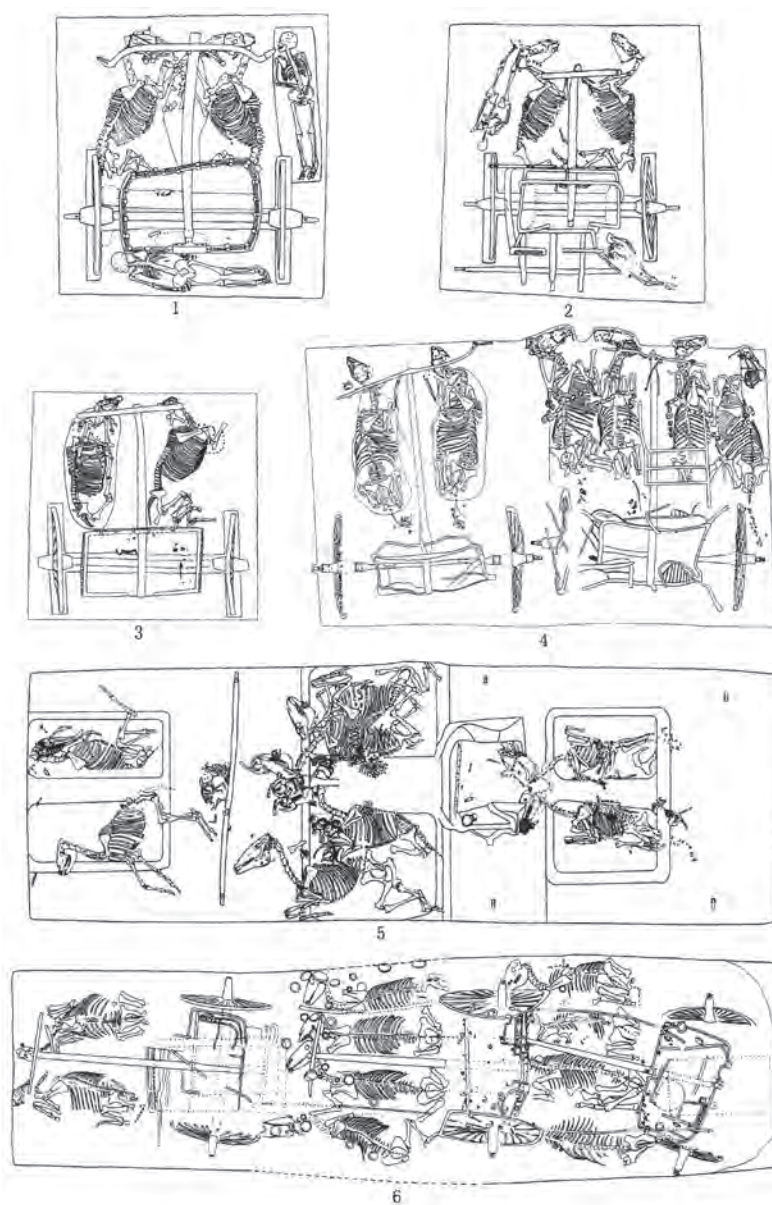
殷墓では人身犠牲が盛行し、鄭州商城・安陽小屯・殷墟西北岡商王陵ではいずれも人身犠牲がみられる。対照的に西周時代の周人墓では、殉葬者は少ないかあるいは基本的には殉葬をおこなわない。周の克殷後、周公は礼を制し樂を作り、周人は次第に人を犠牲とする悪しき習慣を捨てたのである（王_隴 2000）。西周前期以降の姫周貴族の墓には基本的に殉葬者が見られず、このことは殉葬や人身犠牲が、周礼の根本精神にそぐわなかったことを表している。注目すべきは、東夷の古文化においては意外にも人身祭祀と人身犠牲が流行していることで、例えば江蘇省銅山県丘湾の殷代社稷遺跡では、4 つの大きな石を中心として、その周囲に人骨 20 体、人頭骨 2 つ、犬の骨 12 体、身をかがめて膝を曲げた状態の人骨、両手が縛られた状態の人骨が埋められ、大きな石を中心として神々への人身供犠としている（兪 1985b）。春秋時期の東夷諸国家の墓は、山東省臨沂鳳凰嶺邳国墓・莒南大店莒国墓・藤県薛国故城薛国貴族墓のように、みな殉葬者を伴っており、その数は 10 数体にも及ぶ（山東兗石鐵路文物考古工作隊 1988、山東省博物館ほか 1987、山東省済

寧市文物管理局 1991)。秦文化の人身供犠の習俗は、秦文化が殷文化および東夷古文化と深く歴史的な関係性を持つことを示しているのである。

(3) 車馬の埋葬方法

殷周時期の上級貴族墓は、主墓の他に多くは車馬坑が設けられる。現在までに発掘されている秦人の車馬坑の年代は、春秋前期から戦国前期まで続いており、礼県大堡子山・礼県円頂山・甘谷毛家坪・靈台景家莊・長武県上孟村・鳳翔県孫家南頭・鳳翔県西村などがあり、最大で12輛、最少で1輛が埋められている。坑内側の車馬の埋葬方法は全て決まっており、馬はみなひれ伏すような姿勢をしており、絞殺後に縄を解いて、坑の底に浅い溝を掘って設置されている。馬は東に、

車は西に置かれ、車の轆^(訳註2)は東を向いており、馬は轆の両側南北に位置し、馬と車は「駕乗状」をなして、完全に使用当時の状態で埋葬されている。多くの馬車は東西方向に一列縦隊をなしており、車馬具はみな使用当時の位置から出土している。衡飾・轡・轄・馬銜・馬鑣・絡飾や、時には轆馬に革製の甲冑が被せられていることもある。車輿の内外からは車戦兵器と工具、矛・戈・弓・矢・斧・鋸・鍬・鉗・鑊・鑿などがしばしば出土する。馬頭や軸頭を置くための壁龕を持つ坑があり、車輪は坑底の轍上に置かれ、車輿の底にはしばしば御者が殉葬されている(図1-6)。



1. 郭家莊 M52 号墓 2. 梅園莊 M40 号墓 3. 郭家莊 M147 号墓
4. 張家坡 M168 号墓 5. 長安花園莊 M3 号墓 6. 孫家南頭 K3 号坑

図1 車馬坑

周人の間では「拆車葬」と、車馬を分けて埋葬する方法とが流行した。前者は車をばらばらにした後に墓道および墓室内に置く方法である。例えば張家坡 M157 号墓は 2 つの墓道を持つ大墓で、墓道と槨の蓋板に車輪 30 点・車廂 12 点・軸・轅・衡・軛などが、墓主の富と地位を示すために置かれ、馬は生き埋めにされたり、あるいは殺されたりした後に独立した馬坑の中に埋葬された（中国社会科学院考古研究所 1999）。後者は車馬坑の中で馬が下に、車が上に、あるいは左右に分かれて葬られている。例えば三門峽虢国墓地の車馬坑のように、馬を殺した後に坑の底に置く、あるいは馬の上に車を置く場合もある（河南省文物考古研究所ほか 1999）。また山西省曲村晋侯墓地 1 号車馬坑は東西に長い長方形で、坑内は南北方向の版築の隔壁で東西に分けられ、東部には少なくとも 105 頭の馬が埋葬されており、西部には 6 列 48 輛の車が埋められていた（山西省考古研究所ほか 2010）。東周時代の晋系墓の車馬坑はこの特徴を踏襲しており、梁によって東部の馬坑と西部の車坑が隔てられ、例えば太原趙卿墓・上馬墓地・臨猗程村墓地の車馬坑などのように、それらの性質は厩舎坑に類似する。このほかに周人はしばしば青銅製の車馬器を墓室内に置くことがあり、車馬坑内に殉葬者が見られることはきわめて少ない。要するに、周人の車馬は放置した状態か、あるいは使用しない状態で埋蔵されているという点で、秦人と大きく異なるのである。

殷墟と西周時期の殷遺民による車馬坑内の車と馬はしばしば「驚乗状」に置かれており、さらに例外なく車馬器・武器・工具と殉葬者を伴い、秦人の車馬の埋葬と類似している。例えば小屯・大司空村・孝民屯・白家墳・郭家莊・梅園莊などの殷代後期の車馬坑では、いずれも 2 頭立ての車馬が 1 輛殉葬されており、馬は轅の両側に横になっているか、あるいはうつ伏せになっており、輿の外には殉葬者が多数おり、車輪溝内に置かれている車輪もあり、輿内からは戈・弓・矢などの武器、そして弓形器・刀・鏃・鑿・策柄などの工具も出土している（楊 2003）（図 1-1~3）。ある研究者によって礼県円頂山の秦の車馬坑と殷墟の車馬坑が極めて類似しており、殷文化の風格を色濃く表していることが指摘されている（印 2012）。西周時期の殷遺民の車馬坑は、例えば長安花園莊 M3 号墓では、3 輛の車が南から北に向かって縦に並べられており、馬は轅側に分けて配置され、車馬器および工具・武器は全て揃っている（陝西省文物管理委員会 1986）（図 1-5）。また洛陽市林校車馬坑（洛陽市文物工作隊 1999）、張家坡 M168 号墓（中国科学院考古研究所 1962）では、4 頭立ての馬は轅の両側の溝内に置かれ、ひざまずいた姿勢を呈し、頭は壁龕に置かれていた（図 1-4）。このように殷墟と秦人の車馬坑が系譜を同じくすることは明確で、その起源に関係があることは一目瞭然である。

文献の記載に、秦の祖先は馬を飼うことに長けており、かつて殷王のために馬車を操っていたとあることから、彼らは殷人の車馬埋葬方法を熟知していたはずである。さらに西

周時代の秦人が貴族の身分を得た後は、車馬の殉葬方法に殷人および殷遺民の周人とは異なる方法を採用入れたことがよくわかる。2005年礼県西山坪で発掘された4基の西周時代の馬坑（K404～K407）では、馬頭は東向きに龕内に置かれ、4頭の馬は南北に並び、口に銜環を咥え、中間の2頭の間には軛の痕跡があることから、おそらく1輛の4頭立ての車馬坑であろう（趙叢ほか2008）。この坑の馬は驚乗状を呈しており、溝内に伏している状態である。それは春秋期の秦人の車馬坑と完全に一致しており、豊鎬・洛陽の殷遺民の車馬坑とも全く同じである。

（4）殷式土器

発掘調査の進展に伴い、早期秦文化土器の様相に関する認識は次第に深まってきた。1980年代の甘粛省甘谷県毛家坪遺跡の最初の発掘調査では、西周時代の秦文化の遺構まで到達した。その様相は比較的純粋な周の様式を呈しており、たとえば住居址では侈口深腹癭襠縄紋鬲が、墓では鬲・盆・豆・罐のセットが出土し、鬲はいずれも連襠であった。これによって調査者は「毛家坪遺跡の西周時期秦文化は、固有の特徴以外の部分は、周文化と相似している」と認識するに至った（趙化1987）。その後研究者が毛家坪の西周秦文化の遺構と同時期あるいはこれ以前の周辺の考古学文化、例えば寺窪文化・辛店文化・劉家文化・西周文化・先周文化を比較したところ、秦文化と西周文化そして先周文化の関係が最も密接で、それらは先周文化に由来していることが分かった（牛1996）。またある研究者は毛家坪遺跡秦文化住居址第1期遺構の年代を殷代後期にまで遡って考え、毛家坪遺跡を代表とする早期秦文化は、鄭家坡類型文化にその源が求められるものとし、つまり鄭家坡類型文化の人々が周原から甘粛省東部へと西に遷った後残したものと考えた（滕2002）。

2005年に礼県西山坪で発掘された西周時期秦文化の土器と、毛家坪遺跡の土器は類似している。2009～2011年の清水県李崖遺跡の発掘では、30基以上の西周期の土坑と20基の西周期の墓が発掘された。そこで出土した土器はいずれも、殷式方唇分襠鬲・厚方唇簋・三角劃紋簋・大口尊などで、これらの器形は殷系墓でしばしば見られるものであり、殷文化に由来するものであることは明らかである。墓の土器組成は主に鬲・簋・盆・罐であり、種類は豊富である。各墓には、平均して10点以上の土器が副葬されている。周人の副葬土器は鬲のみあるいは、鬲・罐が主で、種類・数は比較的少なく、簡素な作りを特徴とする点で殷系墓と大きく異なっており、むしろ西周時代の殷遺民墓の土器組成と類似している。李崖遺跡の西周時期遺構の年代は毛家坪と西山坪よりも古く、今のところ甘粛東部最古の秦文化の遺構である。秦人の西遷当初の文化が、濃厚な殷の色彩を持っていたことを表しており、王朝の交替があってもなお文化伝統の世襲は断たれなかったことを示

している。

(5) 巨大陵墓の伝統

秦の君主はしばしば巨大墓を造営し、「広大な規模の陵墓は秦の陵墓体系における基本要素」であった（韓・程 1993）。鳳翔県秦公陵园は面積 21 km²にも及ぶ。その中の一つの墓について見てみると、すでに発掘された秦公 1 号大墓の墓坑の面積は（墓道も含めて）5,334 km²、墓室の容積は 54,888 m³であり、これは現在までに発掘されたものの中では、最大規模の先秦墓である。巨大陵墓の伝統は秦代に極致に達し、秦始皇帝陵は全土を挙げて建設され、陵の建設が山場を迎えたとき、動員された労働者は約 70 万人であった。陵园の面積は約 2.1 km²、墳丘の高さは約 43m で、『史記』秦始皇本紀に「草木を樹え以て山に象る」とあるように、秦文化の大きさ、さらに優れた審美感を十分に体现している。

この伝統の兆しは、すでに春秋時代前期には見られる。大堡子山の秦公墓の大きさは、88 ～ 115 m、墓室の面積は 141.6 ～ 241.7 m²であり、同時期の虢国国君墓（18.8 m²）・晋侯墓（約 20 m²）、さらに東周王室の陵墓をはるかに上回る。2001 年に発掘された洛陽体育场路 C1M10122 号墓のような東周王室陵墓は、墓道を 4 方向にもつ亜字形墓で、墓室の面積は約 50.25 m²、年代は春秋前期で、周の平王の墓として知られる（洛陽市文物工作隊 2011）。秦は襄公が周の平王の東遷を護衛し王に仕えて功績があったことから、諸侯に封じられた。周の臣下としての地位は虢や晋には及ばないものの、その墓の規模は大きく、王者の風格を余すことなく伝えている。

礼県秦公墓の規模は殷代の方国首長クラスの大墓に相当する。殷代の大墓と小墓の面積には雲泥の差があり、殷墟西北岡殷王陵の墓室面積は 314 ～ 359 m²である。河南省武官村大墓と山東省益都蘇埠屯 M1 号墓のような比較的大型の墓の、墓室の面積はそれぞれ 168 m²、160 m²である。婦好墓のような中型墓の墓室の面積は 10 ～ 30 m²である。小型墓の面積は約 3 m²である。礼県秦公墓は殷王陵よりやや劣るが、蘇埠屯 M1 号墓のような方国首長クラスの大墓の大墓に相当し、姫周の諸侯墓より遥かに大きく、秦の巨墓大陵の伝統は殷文化に由来していることを表している。

殷墓における等級の遵守は厳格であり、「殷代の帝王は明らかに『王族』を含むすべての貴族の上に君臨し、唯我独尊の専制主義の君主となっていた」（北京大学歴史系考古教研室商周組 1979）。姫周の国君の墓と卿大夫墓と比較すると、規模の上での差異は大きくなく、階層ごとの差異の間隔が小さいことから、階層の分化が不明瞭であることを示している。秦墓における等級のありかたは両極化が激しい。国君墓と卿大夫以下の階級格差は非常に大きく、上下間の差が大きく隔絶した社会構造の特徴を示している。秦人の社会構造と殷人のそれとは、相通ずるところがあるのである。戦国時代の秦はその君主の権威に

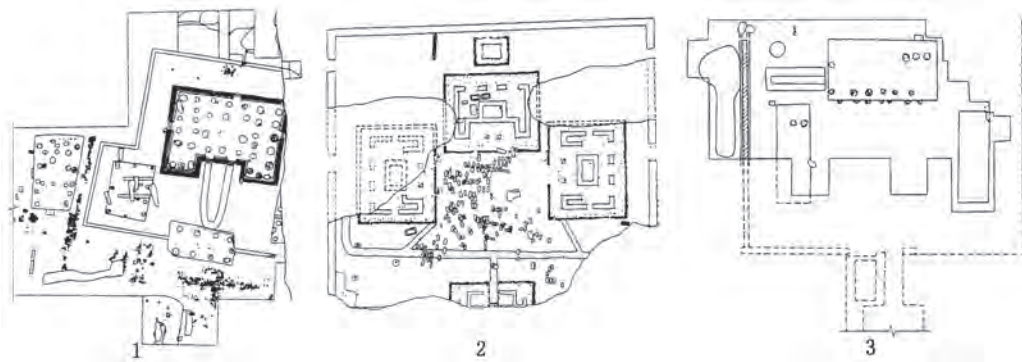
よってこそ、変革を徹底して推し進めることができたのであり、それによって、一躍最大の強国として頭角を現し、天下を統一することが出来たのである。この視点から述べると、戦国期の秦と東方の国々との差異は、殷と周との差異を反復したものではなく、ただ地理的な位置を取り換えただけである。

3. 周文化の要素

『史記』秦本紀に、悪来は紂王を助けたために虐げられ誅されたとある。その子孫は地位が低く、父族の姓は一度趙に姓を改めた。非子は馬を飼う技術を孝王に評価されたことで、清水の秦邑に封じられ、元の嬴姓を取り戻し秦嬴と号した。非子の玄孫であるの秦仲の時、宣王に大夫を命じられ、車馬礼楽を持った。莊公は 7000 の周王の兵馬を頼って、一挙に西戎を撃破し、「西垂大夫」の封号を獲得した。襄公は平王を東に送り、立国することができ、「諸侯と使・聘・享の礼を通ず」。文公は関中に入り、「周の餘民を収めて之を有ち、地、岐に至る」。武公夫人は周王室の女であった。王子帯の乱の時、周の襄王は出奔して鄭にいて、晋・秦に助けを求め、「穆公、兵を將いて晋の文公を助けて襄王を入れ、王の弟帯を殺す」。秦の景公大墓の石磬の銘文には「天子匱（燕）喜し、龔（共）桓これを嗣ぐ」とあり、『石鼓文』而師には「天子□来、嗣王始□」とあり、周の天子はかつて秦の地に至り、景公と酒盛りを開いて楽しみ、狩りをして遊んだ。このように西周から春秋時期に至るまで、秦と周は密接な関係性を保っている。周王室は「天下共主」として、名分の正統性と、文化の主流を代表しており、秦はその出現期の発展の過程において、周人に近づき用を果たし、周礼を学び、周制を吸収し、周と婚姻関係を結び、襄公は周王室をたすけた。これらのことはすべて自然なことである。秦は再び宗周の故地に居していたが、文化上では周の古い部分を依然として多く有しており、多くの面で周文化の特徴を踏襲している。

（1）宗廟・朝寝建築

1970年代に発掘された雍城馬家莊1号建築の宗廟遺址は、祖廟・昭廟・穆廟・中庭・圍壁・門によって囲まれ、完全に閉鎖的な空間となっている。3つの宗廟は「品」字形に分布しており、祖廟は北寄りに位置し、平面形は「凹」字形であり、広い三室に面し、前堂・主室・後室および東西の狭室から構成されている。昭王廟・穆王廟は祖廟の南側に位置し、東西対象になっており、形式と大きさは祖廟と同じである。祖廟の北には基壇を持つ四阿があり、角柱を有している。院落の南門には門塾があり、散水より北に東西10mの「墀」がある。



1. 雲塘建築基壇 2. 馬家莊1号建築 3. 侯馬程王路13号地点基壇

図2 宗廟建築基壇

門道は散水の箇所を左右に分かれており、昭廟・穆廟および東西の囲い塀両門の踏み固められた路面まで道が続いている。中庭は中心が窪んでおり、外周はやや高くなっている。中庭と祖廟・昭廟の内からは様々な種類の祭祀坑が181基見つかり、それぞれの祭祀坑は3列に並び、分布には一定の規則がある（陝西雍城考古隊1985b）。建築土台を壊して作られている祭祀坑からは春秋時代後期から戦国時代前期の土器が出土し、これはこの建物の使用された年代の下限を示している。宗廟はおそらく徳公の時期に建設が開始され、祖廟は初めて封建された秦の襄公を祭っており、静公は穆廟で祀られ、文公と憲公はいずれも昭から三代の範囲であるが、継いで国君となったことから、みな同じ昭廟に統合された可能性がある。武公・出子は徳公の兄弟であり、廟は建てられていない。

馬家莊宗廟の形式は経学家による周代の宗廟の復元と一致しており（韓1985）、発掘調査された周原遺跡雲塘村の西周宮殿建築（周原考古隊2002）、そして晋都新田の東周建築基壇とも多くの類似性がある（山西省考古研究所侯馬工作站1987）。たとえば主殿と東西の廂房の間は連続性がなく、三者は「品」字形に配置され、外壁には専用の囲い塀があり、建築単体の構造は「凹」字形を呈し、庭院の南部居中には門塾などがある（図2）。研究者は秦の宗廟は西周時期の周人の建築の特徴を継承していると認識しているが（徐・王2002、杜2009）、これはもっともである。

ボーリング調査によって判明した馬家莊3号建築址は1号建築址の西南約500mに位置し、南北の全長326.5m、北端は幅86m、南端は幅59.6mで、面積は21,849㎡である。南から北へ、5つの院落・5つの門庭に分けることができ、これはひとつの五門三朝構造の朝寝建築遺構である。第一院落の南門の外には「屏」があり、第二院落の中部北寄りの両側にはそれぞれ長方形の建築があり、第三院落の中央には面積約586㎡の長方形の建築があり、第四院落内には3箇所的小型の基壇があり、第五院落の中央北寄りおよび前方の両側にそれぞれ品字形に並んだ建築がある（陝西省雍城考古隊1985a）（図3）。

雍城の朝寝建築は当時の諸侯が五門三朝制を使用することができたことを表しているのか、あるいは秦が僭越して周の天子の礼を使用していたことを表しているのだろうか。いずれにしても、秦人の門朝制度は周制を継承しているのである。西周時期の「小孟鼎」の銘文に孟が周の康王に向けて捕虜を献上した過程の記載があり、その中から西周の門朝制度を復元することができる（李学 1987）。孟は「南門に入る」^(訳註 3)、すなわち臯門に入り、その後「獸を以て進み、大廷に即く」とあり^(訳註 4)、つまりもともと臯門の中から庫門の中にいた首長を庫門に連れて行くと、大廷が庫門の内側、雉門の外にいるのがみえ、そして「三門に入り、(位に)中廷に即き北嚮す」とあり^(訳註 5)、「三門」とは雉門であり、雉門の内側は「中廷」である。雍城の朝寝建築に照らし合わせると、第二院落は外朝であり、第三院落は治朝である。広義の内朝とは応門よりも内側の部分を指し、つまり第四院落・第五院落遺構にあたる。

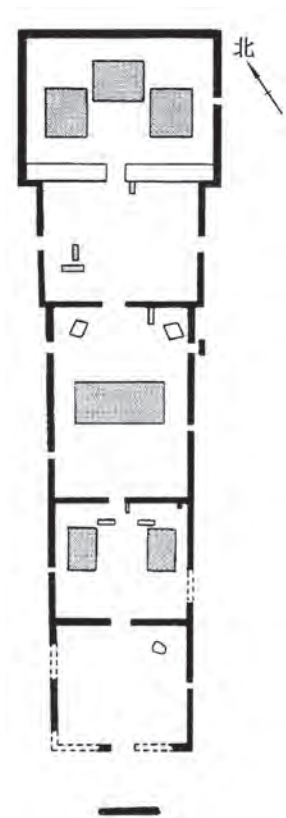


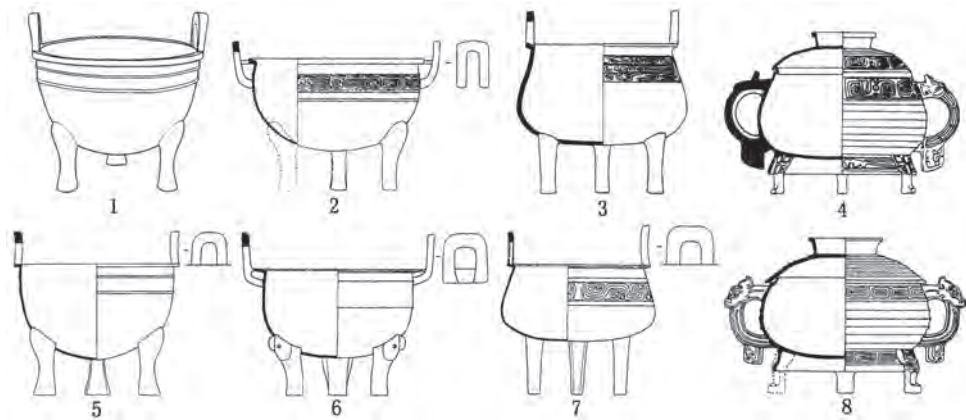
図3 馬家莊 3号
建築基壇

(2) 用鼎制度

殷人の礼器は酒を重んじる組成になっており（郭 1981）、殷墟の貴族墓の副葬された銅器は多くが觚・爵・觶などの酒器が中心である。周人の礼器は食を重んじた組み合わせで、鼎・簋が中心である。もちろん、殷礼から周礼までの間に、並行して交錯する段階もあった。西周前期の器用制度の基本的な枠組みは酒器一組と炊食器一組が中心となって構成されており、また酒器は一般に実用器である。西周後期には鼎・簋に代表される列鼎制度が出現し、新たな器用制度を形作り、前期の器用制度に取って代わり始める（曹 2000）。兪偉超・高明の周代用鼎制度の研究によると、西周時期は『春秋公羊伝』桓公二年条の何休注にあるように「天子九鼎を用い、諸侯は七、卿大夫は五、元士は三」であり、そして、東周時代には『儀礼』などの古典にあるように、諸侯は大牢九鼎を用い、卿あるいは上大夫は大牢七鼎を用い、下大夫は少牢五鼎を用い、士は牲三鼎あるいは特一鼎を用いたと述べられるように、礼制の僭越現象が起こった。この過程において、卿が九鼎を用いることと、庶民が土製鼎を用いることは排除されなかった（兪 1985a）。

春秋時代から戦国前期までの秦墓は、同時期の東方姬姓国家の墓よりも、西周時期に形成された用鼎制度の方に従い続けており、それは主に2つの点において現れている。

1点目は、西周時代から春秋前期までの列国の1基の墓から出土する列鼎はみなセット



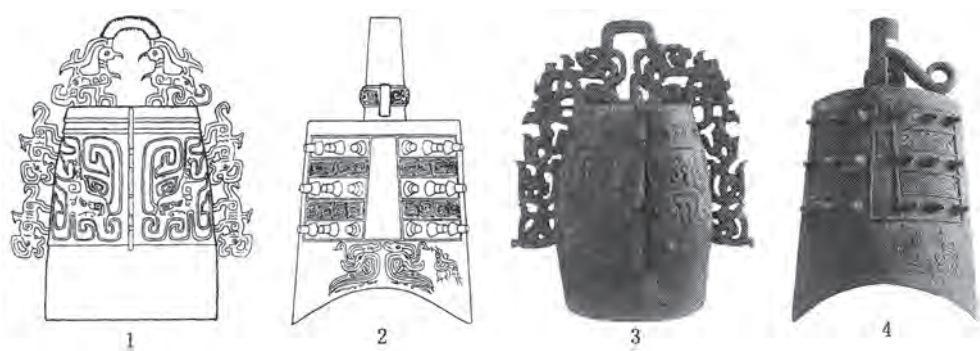
1. 多友鼎 2. 晋侯墓地 M8:28 3. 張家坡 M320:3 4. 張家坡 M253:3
5. 西 M2003:18 6. 西 M2003:9 7. 西 M2003:17 8. 西 M2003:13

図4 銅礼器

だが、春秋中期以降の晋や楚などの東方国家の貴族墓からは一般に2セット以上の銅列鼎（あるいは正鼎）が出土し、『儀礼』聘礼と照らし合わせると、複数セットの正鼎は飩（煮た料理）か脍（生肉・魚）かの2種類に分けられ、礼制の繁雑化が示されているという点である。今までに発掘された秦墓で2セット以上の銅鼎を用いている例は一つもなく、始終質素さを保持しているという特徴は、西周と一致する。

2点目は、春秋中期以降、簋以外は、東方国家の墓には蓋豆・簋・敦などの新しい盛食器が流行し、西周時代と比較して種類は大いに増加し、銅簋を副葬する傾向に取って代わったという点である。これらの新しい変化は秦ではほとんど起こらず^(註1)、同時期の秦墓では依然として鼎・簋を適切に配する西周の古い制度を忠実に守っており、七鼎には六簋を配し、五鼎に四簋を配し、三鼎に二簋を配す、整った形式を維持している。東方国家の鼎制が新しい制度をつくり出している時、秦人はまだ周人の古い慣習に浸っており、これを誇りに思っていたのである。

現在知られている中で最古の秦の鼎が出土しているのは礼県西山坪 M2003 号墓で、この墓は三鼎二簋の組み合わせで、年代は西周後期である。銅鼎のうち1点は沿耳球腹蹄足鼎で、無紋、口縁部下に2本の凸弦紋があり、器形は厲王時期の多友鼎と類似する。別の1点は、沿耳球腹蹄足鼎で紋様がなく、器形は晋侯蘇鼎と類似する。最後の1点は縁耳垂腹柱足鼎で、平底、縁の下に窃曲紋帯がある。垂腹柱足鼎は西周中期にしばしば見られるが、さらに西周後期まで継続して見られる。春秋時期の秦鼎は口縁がすぼまる形状で、垂腹の器形はこの種の鼎の様式を踏襲しているが、柱足は蹄足に変化する。この墓から出土した銅簋では、蓋と腹部に均しく瓦紋が施され、縁の下部に窃曲紋あるいは重環紋帯があり、耳の下部に小環、圈足の下部に3つの小足があり、関中における周墓の同類器と完全に一致する。秦の銅礼器の組み合わせと形式は、いずれも全て周文化に起源があると見る



1. 眉県罇鐘 2. 眉県甬鐘 3. 大堡子山秦子罇 4. 大堡子山秦子甬鐘

図5 銅鐘

ことができる（図4）。

（3）楽懸制度

殷墟出土の銅製打楽器は殷人が「庸」としている楽器で、一般的には鐃として知られるものである。ほとんどは3点で一組をなし、まれに5点で一組をなすもの（殷墟婦好墓）もある。庸の器体は瓦を2枚合わせたような形で、管状の柄がつく。柄は中空で器体に通じており、架や座に挿して鳴らすことができ、雨乞いの祭祀に用いられた。西周時期の周人はまず鐘を発明し、掛け並べて演奏する方法を採り始めた。西周前期の甬鐘は3点で一組であり（宝鶏市竹園溝 M7 号墓）、西周中期の甬鐘は3点（陝西省長安普渡村長由墓）、4点（山西省晋侯墓地 M9 号墓）、あるいは5点（山西省絳研横水 M1 号墓・M2 号墓）で一組をなす。西周後期の甬鐘は8点で一組をなしており、例えば陝西省扶風県齊家村窖藏出土の一組8点の中義編鐘、晋侯墓地 M8 号墓出土の二組16点の編甬鐘のように、それぞれ定まった形になっている（李純 1996）。西周の罇はあまり見られず、現在では随州葉家山罇・克罇・眉県楊家村罇の3例に限られる。葉家山の罇は西周前期に属する。克罇は清代末に扶風県任村の西周窖藏から出土し、甬鐘が若干数供伴している。眉県罇もまた窖藏からの出土で、3点一組、10点の甬鐘と供伴しているが（劉懷 1987）、2つの組には欠損のある可能性があり、年代はみな宣王時期に属する（図5-1,5-2）。周代の鐘・磬はしばしば一緒に用いられるが、西周時代の編磬は出土数が多くはなく、陝西省張家坡井叔墓・山西省晋侯墓地 M8 号墓・宝鶏市賈村塬矢国墓・周原召陳村基址からいずれも出土しているが、散逸あるいは失われ、一組5点以下となってしまう（李純 1996 : 48）。

秦人は楽器の罇を特に好み、楽懸の中でも罇は甬鐘と同じように欠かせない。よく知られている秦国君の銘を持つ楽器は、大堡子山秦子鐘罇（図5-3,5-4）・宝鶏太公廟の秦武公鐘罇・北宋内府蔵の秦公罇と秦公鐘のように、鐘があれば必ず罇もある。形状から見ると、秦の罇は西周罇の楕円形の型式をかたくなに堅持し、東方国家の罇のように合瓦形には変

化しないものの、四方に突出した華麗な扉稜があり、鉦部の主体紋様が随時変化するのみで、列国の中でも独自の一派をなしている。西周罇には全て四方に突出した扉稜があり、眉県出土罇の両側に透雕偏虎翼、前後に偏鳥雲翼が、克罇の鉦部に四出透雕扁連環夔紋翼があるように、これらの罇と秦の罇との前後の発展関係は明確である。秦の甬鐘と西周後期の甬鐘の器形は類似しており、礼県と宝鶏の秦公鐘鼓部の顧首対夔紋と小鳥紋は、西周後期の鐘にしばしば見られるもので、例えば眉県鐘・中義鐘・南宮乎鐘がある。組み合わせから見ると、編罇は3点で一組、編甬鐘は8点で一組というのも西周後期の制度を継承している。太公廟の5点で一組の甬鐘の紋様は同一で、銘文は連続するが不完全で、3点が欠損している。大堡子山秦子楽器坑出土の二組10点の編磬は、一組につき5点を左右に分けて配置している。磬が二組に分かれるという現象は周代から比較的に見られ、例えば晋公墓地 M8 号墓の8点の磬は2箇所に分かれて積まれているが、盗掘されているため、2点欠損している可能性がある（北京大学考古系ほか 1994）。上村嶺 M2011 号墓（號太子墓）（河南省文物考古研究所ほか 1999）・侯馬上馬村 M13 号墓（山西省文物工作管理委員会侯馬工作站 1963）・長治分水嶺 M269 号墓の石磬はいずれも二組で（山西省文物工作委員会普東南工作組ほか 1964）、それぞれの組は5～10点である。これらのことから、秦人の楽懸制度は周人の制度を踏襲しているということについては、ほとんど疑いないといえる。

大堡子山楽器坑内の3点の罇は西に、8点の甬鐘は東に一直列で並んでいる。周代の甬鐘が大きき順に掛けられているのとは異なり、楽器坑内には甬鐘は中心が一番大きく、両側が小さくなるように吊り下げられて並んでおり、西から1番目と、2番目の鐘の右側の鼓部には第二基音の標示がない。第二基音がないのはセット全体の最大の鐘と2番目に大きい鐘であるはずであるが、このセットで第二基音がない鐘はそのどちらでもない。西から3番目、4番目の鐘は器の大きさが最大とそれに次いでおり、右側の鼓部には翻って第二基音の標示があり（小鳥紋）、第二基音のある鐘がセットの中央に位置していることから、周代の甬鐘のつくりや編鐘の掛け方の通例とは付合しない^{（訳註6）}。これはおそらく、当時の秦人は編鐘の礼儀を象徴する意味をより重視し、実際の演奏機能はあまり重視していなかったか、あるいは当時の秦人はまだ編鐘の製作方法と使用方法をまだ正確に把握していない初学段階にあったかの、いずれかであることを示しているのであろう。秦武公鐘の時期には、正しく使用されるようになった。太公廟窖坑内の編鐘は大小順に一直列に並んでおり、甲乙鐘はそれぞれ最大とそれに次ぐ大きさで、全て第二基音の標示がなく、そのほかの3つの鐘は、全て右側鼓部に小鳥紋がある。これは秦人の周楽に対する習熟度が次第に成熟していく過程である。春秋後期に至ると、秦景公大墓の石磬銘文に、「百楽を咸く奏で、允楽は孔煌す」とあるのはすなわち、種々の楽器で合奏するとき、その音は音量があり調

和が取れた音階を奏でる段階にまで至っていたことを示しているのである。

(4) 周式の土器

西に遷都したのちの秦人は、関中との関係を築いていった。およそ孝王時代に該当する師酉簋の銘文には、師酉が所管する邑人・虎臣の中には秦夷がいたと書かれている。清水の秦人は非子の受封の前から周都に派遣され、王宮衛隊に加わり、王室を守っていたのかもしれない。清水県李崖遺跡の西周土器の中には、前述の殷式土器をのぞいて、周文化の要素もまた相当の比重を占めており、例えば連襠鬲・倣銅扉稜鬲・周式簋・双耳倣銅簋・縄紋平底盆・弦紋小罐・無紋罐などがある。周の克殷後、周文化の土器は周人が武装植民して全国に拡大するにつれて、李崖のような周式土器の具体的な起源の地を明示することは困難にはなるが、その中の弦紋小罐と無文罐は、関中が起源であることに間違いはない。この類の器物は殷末には現在の周原礼村・鳳翔西村・豊西の先商文化の遺構・遺物に出現し、西周時期の周原遺跡と豊鎬遺跡のなかにしばしば見られ、序列を形成している。この種の弦紋罐は、天馬-曲村遺跡などの関中外の西周遺跡では、ほとんど見られない。

西周中後期に、早期秦文化は転換期を迎え、土器の様相は大きく変化し、西山型土器に見られた殷式の要素はほとんど消失し、純粋な周式になる。西山と毛家坪の住居址から出土する西周連襠鬲は、深腹筒形癩襠や短頸鼓肩のものがあることから、関中の周鬲を模倣したものであることが明らかである。このほか、連襠甗と卵形瓮も関中の周文化にしばしば見られる器形である。墓の土器組成は、鬲・盆・豆・罐が主となっており、鬲は侈口癩襠鬲のもの、円腹帯蓋のもの、平折沿帯扉稜のものがあり、全て連襠錐足である。盆は寛折平沿で、深腹である。豆の多数は浅盤・折腹・細柄収束・中空である。罐には喇叭口罐と折肩罐があり、前者は口径が概ね小さく、肩部の多くに双鈕がある。類似する器形は、いずれも関中周文化中に見られる。早期秦文化の転換とは、実質「殷化からの別離」の過程であり、器の使用方法においては周文化に近づいていく。

(5) 文字の特徴

秦の文字に対する総括的研究は、王国維が筆頭となり推し進めた。それは、「史籀篇疏証序」と「戦国時秦用籀文六国用古文」にある有名な「古籀東西説」である。1. 篆文の多くは籀文から出ており、「つまり、李斯以前の秦の文字は、これを篆文ということもできるし、籀文ということもできる。『史籀篇』の文字は、秦の文字であり、周秦の頃の西土の文字である。……壁中古文は周秦の頃の東土の文字である。2. 戦国時代の秦は籀文を用い、六国は古文を用いた。3. 「古文・籀文とは、戦国時代の東西2つの地域の文字の異名である。いずれも殷周時代の古文に由来するものである。一方、秦は豊鎬の地に居り、

その文字はあたかも豊鎬の名残りのようである。それ故、籀文および籀文から生まれた篆文は、殷周時代にまで翻ってみれば、東方の文字に近いのである」(王_國1959)。この学説の影響は極めて大きく、賛成する者は少なくないが、反対する者も多数いる。

新しい文字資料の出土や公開に伴って、数名の研究者たちは王国維説の新たな分析検討をし始めた。趵鼎の銘文に「史留受王命書」とあることから、史留とはすなわち史籀であり、周の宣王期の太史として、確かにその人が存在し、その時に『史籀編』が編纂されたのであり、王国維が言うような「春秋戦国の間に秦人がこれを作って子供への文字教育に使用した」ものではない、ということを示した。陳昭容は秦系文字・東土文字と、『説文』の古文・籀文を全面的に比較した。すると春秋時期の秦の文字と籀文は同じものが半数以上を占めており、それが戦国時期には半数以下に減ることがわかり、時代が早ければ早いほど、籀文が秦文字に与えた影響は大きいことが判明した。ここから個別の文字資料と籀文との対応関係をみてみると、例えば秦武公鐘の銘文は字形が全て籀文と同じであることがわかる。秦の文字の中で古文と同じものは少なく、占める割合は極めて低く、ほとんど無視してもよい。古文は戦国時期の東土において確かに使われていたが、ただし東土の文字も籀文のものと合致しており、『史籀編』の文字は東・西の2つの地に対して影響があったことを表している(陳_昭2003)。これらの研究は王国維の研究に対する有益な修正となり、また秦系の文字は、西周王官が当時使用されていた文字を採り入れて編纂した字書に由来すること、端的に言えば、西周後期の文字に由来することも明らかにしている。

不其簋は秦器であり、銘文中の伯氏と不其は『秦本紀』にある荘公の兄弟であると考えられる研究者もいる(陳_夢2004、李_學1980)。この説は疑われる点が多いが、別の論文で検討することとし、ここでは深く追及しない。『秦本紀』にいわく、「(文公)十三年、初めて史有を以て事を記す。民、化する者多し」という。秦人世代の牧馬御車は、素朴で紋様はなく、文公の初期に至りようやく史官についての記事が出てくるようになる。このことを考慮すると、秦の文字の出現と形成の時期は、我々が考えていたほど早くなかったのかもしれない。もし今後も西周期の秦の文字が発見されないようであれば、それもまた道理ということになる。

現在確認されている最古の秦の文字資料は、大堡子山の秦公器・秦子器・太公廟秦武公鐘罇であり、全て春秋前期に属し、字体はすらりとして美しい。1920年代に出土した天水秦公簋について、王国維は次のように指摘した。「字跡は石鼓文に極めて近く、金文の中で石鼓文に近いものは、この虢季子白盤とこの敦耳だけである」(王_國1959)。実は、上述の春秋前期の秦銘は虢季子白盤とさらに近く、共通性があることは明らかであり、それは例えば字体が細く、均一で規則性があり、四言韻語である点などである。文公四年(紀

元前 762 年)に汧河と渭河の交わるところに遷都した。現在の汧河と渭河の合流点の東側一帯である。武公十一年(紀元前 688 年)小虢を滅ぼす。小虢とはおそらく西虢の残りの部分であり、虢鎮の付近にあり、秦とは約 74 年の間、隣同士にあった。虢季子白盤は宝鸡市虢鎮から出土したと伝えられており、その年代は幽王から携王の時期であるとする研究者もいる^(註2)。このように、秦は虢と接点をもつ可能性があり、西虢の文字が秦の文字に与えた影響も注意する必要があるかもしれない。

4. 西戎文化の要素

『史記』秦本紀によると、周厲王の時期に西戎が侵入し「犬丘大駱の族を滅」した。周の宣王が即位し「すなわち秦仲を以て大夫となし、西戎を討つ。西戎秦仲を殺」した。宣王は莊公に西戎を討たせ、これを破った。襄公二年には「戎、犬丘(の世父)を囲む。世父、之を撃つ」とある。襄公十二年に「戎を討ちて岐に至り、(卒す)」。文公十六年「文公、兵を率いて、戎を伐つ。戎敗走す」。武公十年「邽・冀の戎を伐ち、初めて之を懸にす」。秦の穆公は由余を用いて戎(王)を討ち、「国を益すこと十二、地を開くこと千里、遂に西戎に覇たり」とある。これらの記載の中で、秦は戎を敵と見なし、絶えず討伐し続け、その言葉の中でも明確に自らを戎狄の外に置き、自らは「中国」に居するものとしている。もちろん、戦争があれば妥協もあり、秦武公鐘の銘文に「蛮方を虢事せしむ」とあるように訳註7、秦と戎にも国交を親密にした時期があったことを示している。秦は西戎の地において興り、その文化が地理的にみてある程度の「戎狄性」があることは免れない。争いは必ず文化交流をもたらし、早期秦文化の一部の要素は、あるものは西戎文化に由来するものであり、あるものは西戎が媒介となっている^(註3)。

(1) 屈葬

清水県李崖遺跡の 20 基の西周時期の墓のうち、わずかに 1 基だけ被葬者は仰向きで屈葬され、両脚が僅かに曲がっており、大腿骨と脛骨の角度は鈍角であった。もう 1 墓の中の人骨は散乱しており、攪乱や浸水の影響を受けた可能性がある。その他の 18 基の墓の被葬者はみな伸展葬であった。西山坪の 4 基の西周時期墓のうち、3 基の士級相当墓は伸展葬で、1 基の庶民墓は屈葬である。毛家坪の西周時期墓はみな屈葬であり、いずれも庶民である。春秋から戦国前期に至るまで、秦公墓被葬者の埋葬方法は伸展葬(大堡子山 M2 号墓・M3 号墓)で、5～7 点の鼎が副葬されている墓は明らかにみな伸展葬であり、1～3 点の鼎が副葬されている墓では伸展葬と屈葬はほぼ同率、庶民の土器が副葬されて

いる墓では屈葬が 85%、伸展葬が 4.4%である。西周後期以後、中・低級の秦墓で屈葬が流行しはじめ、少数の伸展葬グループが人口の多数を占める屈葬グループを統治するという図式が出来上がった。

屈葬は嬴秦本族の伝統ではなく、嬴秦族の源流とも関係がない。秦文化のこの種の特に体を縮めた葬制は殷文化と周文化の中では滅多に見ることがなく、これは秦人が隴右で発展する過程で、人口構成が複雑化するにしたがって、現地のある種の影響を受けて出現したものである。

屈葬は体を折り曲げた姿勢をとる葬法で、甘粛・青海地区における古文化においてかつて流行し、半山～馬廠文化時期は甘粛省東部において側臥屈葬が流行した。これ以後の齐家文化時期では、屈葬のみあるいは屈葬を主とした墓地は消え去り、これに代わって仰身直肢葬が出てくる。齐家文化以後の青銅時代の卡約・辛店・寺窪文化ではいずれも仰身直肢葬と再葬が流行し、屈葬墓は散見される程度で、わずかに甘粛省慶陽市合水県九站遺跡の 4 例、青海省民和県核桃莊遺跡の 4 例、甘粛省臨夏県蓮花台遺跡の 2 例が見られるに過ぎない。1980 年代に毛家坪の西周期の地層から 1 基の墓 (TM7 号墓) が発掘された。人骨は頭位東向きの仰身屈葬で、大腿骨と脛骨の間の角度は 90 度以下、1 点の彩陶双耳圓底鉢が副葬され、夏殷時代に相当する。つまり、秦の屈葬はある研究者がいうように、「土着の風習の継承と発展 (趙化 1987)」であり、その初源はまだ見つかっていない。

西周時期に秦文化と直接接触した西戎文化は寺窪文化である。礼県の調査では 20 箇所あまりで当該文化の遺構が発見され、秦文化の遺跡と混在している。この類の遺跡は今に至るまで発掘されておらず、その葬制は不明である。合水九站遺跡・甘粛省莊浪県徐家碾遺跡・甘粛省西和県欄橋遺跡の寺窪文化墓では、圧倒的多数が仰身伸展葬と再葬であり、礼県の寺窪文化墓もそれと同様であっても不思議ではない。秦の屈葬より早い時期で年代も連続しており、空間距離もそう遠くない屈葬文化としては、新疆ウイグル自治区ハミのイエンプラク文化がある。1986 年に 76 基の墓が発掘され、墓の造営には日干しレンガが使用され、葬制は側臥屈葬が多く、副葬土器の器種は単耳鉢・単耳豆・腹耳壺・単耳杯が代表的で、彩陶が比較的多く、紅地黒彩が主であり、年代は大まかに西周前期から春秋中後期まで続く (新疆ウイグル自治区文化庁文物処ほか 1989)。彩陶の器形と紋様から見ると、寺窪文化は辛店文化・四壩文化と密接な関係性がある。その前身はおそらくハミ固有の天山北路文化である。四壩文化は河西回廊からハミ盆地に流入した甘粛・青海地区の馬廠類型後期遺構・遺物であると考えられ、東遷してきた西方の人々の一部と再び合流して形成されたグループである (邵 2009)。屈葬を除くと、イエンプラク文化と秦文化にはほぼ共通点はなく、両者の起源にいかなる関係性があったのかを説明することは困難である。

より視野を広くすると、ユーラシア草原地帯では早くから屈葬が流行していることがわかる。紀元前 2000 年に黒海北岸の洞室墓文化では屈葬文化が盛行していた。紀元前 2000 ～ 1000 年の、ウラル以東からエニセイ川のアンドロノヴォ文化、ミヌシンスク盆地のカラスク文化では、いずれも一定の割合で屈葬がみられる。紀元前 8 ～ 3 世紀のユーラシア東部草原のアルタイ・トゥヴァ・モンゴルウランゴムなどの遊牧民の間では、頭位西向の側臥屈葬が広く流行した。ウランゴムの墓は石材あるいは木材を葬具に用いており、墓内には複数人数が側臥屈葬されている。トゥヴァ地区に分布するウユク文化の墓では、その前期においてはアルジャン王陵に代表されるように、巨石で築いた巨大墳丘下に複数の槨室を構築し、被葬者と殉葬者はみな屈葬にする。そのうちアルラン 1 号墳の年代は、紀元前 9 世紀末から 8 世紀初めである（楊・張 2013）。すでに秦の屈葬とユーラシア草原との関係に注目している研究者もあり、屈葬の起源が西アジア・中央アジアにある可能性があると考えられている（趙^化 1996・馬 2008）。

紀元前 10 ～ 9 世紀、サヤンからアルタイ地区の遊牧民が次第に形成され、紀元前 8 ～ 7 世紀になるとその文化は最盛期を迎え、外へ拡大し、周辺地域に大きな影響を与えた。しかしこの地域と甘粛省東部の秦文化とは距離がはるかに離れており、2 つの地域の交流にはまだその中間となる地域が欠けている。たとえユーラシア草原の遊牧文化が秦の葬制に影響を及ぼしていたとしても、それは大規模な人の移動や融合によってではなく、宗教信仰と喪葬観念の伝播による可能性の方が高い。この類の伝播は、少数の聖職者の移動のみによって成されることもある。

考古資料が示しているのは、西周時期の関中付近の住民とユーラシア草原および付近の東部には一定の文化関係と人の往来があった（王^輝 2013）。1 点の銅勾戟は、長胡三穿で斜援、直内、蓋は人頭形である。人頭は鼻が高く目のほりが深く、下あごに短いひげがあり、眉毛はやや太く、明らかにコーカソイド^{（訳註⁸）}の特徴を持っている。最も典型的なのは周原召陳村宮殿建築址出土の 2 点の蚌雕人頭像で、面長で、高い鼻と深い彫りの目をし、唇は薄く、先の尖った筒形の帽子を被っているが、帽子の先端は切り落とされている。その中の 1 点の切断面には「巫」の文字が刻まれ、骨製簪の装飾として使用されたと言われており、年代は西周後期で、発見者はこれを西域のサカ人^{（訳註⁹）}の頭像と考えている（尹 1986）。またある研究者は、頭像は写実的であり、おそらく中央アジアのコーカソイドのいずれかの系統であろうとした。また占い師や魔術師のイメージが表現されている可能性があり、周人がそれを作り直し身分を刻印したのだと考えた（水 1999）。頭像は当時の周人とユーラシア草原の西方人種が既に接触し、その生活様式を理解していたことを示している。秦と周は密接に交流し、そして周人は西陲を守っていたため、その管轄区内で遠方の異民族活動があってもおかしくはない。この視点から考えると、秦の屈葬の起源として

考えることもあるいは可能かもしれない。

(2) 金製品

中国先秦時代の金製品は北方地区と中原地区の2系統に分けられる(張 1993)。北方地区ではイヤリング・ブレスレット・腕飾り・ネックレスなどが黄金で作られ、夏殷時期の遺跡ですでに発見され、主に長城に沿って分布している。中原地区では主に、木質漆器と青銅器の表面に金箔を貼って製作され、例えば殷墟・琉璃閣・蘇埠屯殷墓では金葉や金箔の飾りの欠片が出土している。中原の殷周貴族は、銅器・玉器によって身分や地位を象徴することを習慣としており、金を用いることは好まなかった。西周後期以降、おそらくは北方からの影響により、一部の貴族は伝統的な紋様装飾の金帯飾を製作し始めた。それらは晋侯墓地・虢国墓地・梁帯村芮国墓地などから出土している。ただしこれはごく一部の現象であり、中原地域における金製器物の製作が定着するのは春秋時代以降で、曾侯乙墓の金盞・金杯・金勺のような金製の容器が登場してからとなる。

紀元前 3000 年紀から、ユーラシア草原の古代諸民族は意識的に金鉱を採掘し、金製品を作り始めた。前期鉄器時代に至り、中央アジア草原遊牧文化が形成され、金器は地位と財力の象徴となり、金の採掘・冶金・製作技術は長足の発展をとげ、金器の種類、造形はさらに豊富になった。トゥヴァ地区のアルラン 2 号墳やイシク・クル湖付近のサカ人金武士墓に代表されるように、ユーラシア草原遊牧文化の金器は主に人体の装飾品や、当盧・馬鑣などの馬具および兵器の装飾、例えば短剣・箭箙・箭鏃の金張りあるいは鍍金などが含まれる。研究者はユーラシア草原の金器の文化が中国北方地区に影響を与え、それが中原に波及したと考えている(馬 2009)。

春秋時期の秦の金器は主に 4 つに分類される。第 1 に、身に着ける服飾と装甲である。宝鶏市益門村 M2 号墓では金製帯鉤・帯釦・円泡・串珠が出土している(宝鶏市考古工作队 1993)。鳳翔県高荘 M10 号墓出土の金襟鉤が出土している(呉・尚 1981)。大堡子山出土の口唇紋鱗形・対角雲紋金箔飾片は、韓城市梁帯村芮国墓地出土の銅飾片と形状が同じであり、人の体の異なる部位を防護するための鎧片であると考えられている(張 2011)。第 2 に、車馬具である。益門村 2 号墓では金絡飾が出土しており、馬家荘宗廟遺跡 K17 車馬坑・K121 車馬坑では鴨頭形金円策・蟠虺紋金円泡・獣頭紋金方泡・金節約・金異獸などが出土している(陝西雍城考古隊 1985)。大堡子山出土の 8 点のみみずく形金飾片は、2 点で一対をなしており、左右対称で、ちょうど馬首の両頬上に、その頬部分を保護することを目的として、装着させることができる。第 3 は、武器と工具の組み合わせ部分である。益門村 M2 号墓では金柄鉄剣・金首鉄刀あるいは銅刀、高荘 M10 号墓出土の金首銅削が出土している。第 4 は、嗜好品である。大堡子山・宝鶏魏家崖では金虎が出土してい

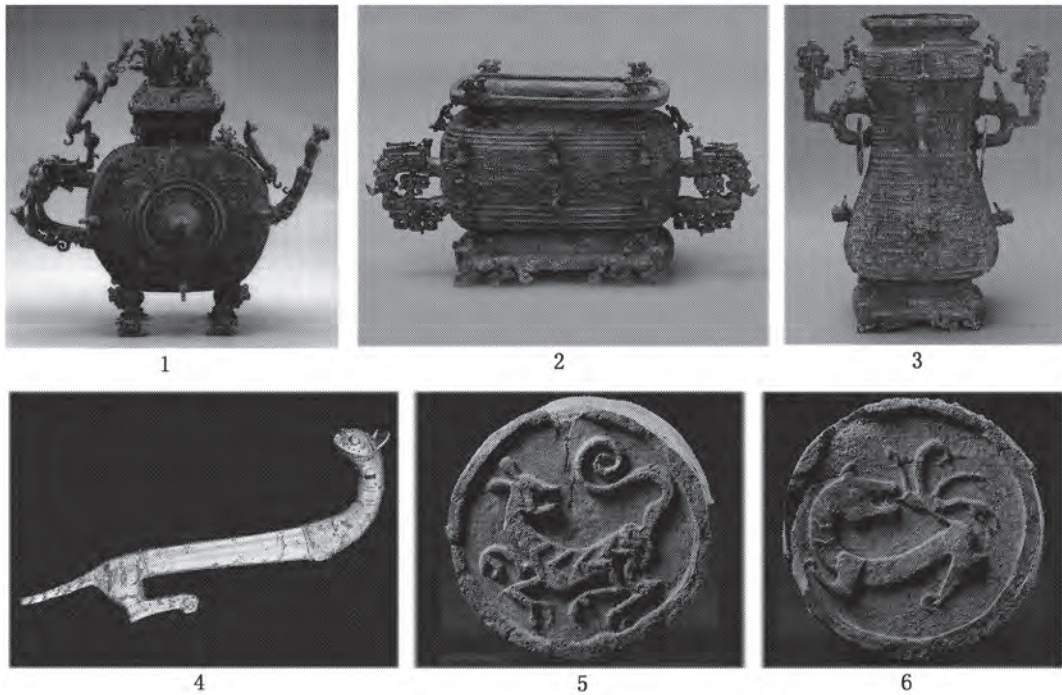
る。秦の金器の汎用性の高さは列国の中でも随一であり、秦国の支配者が金を好んだことを示している。これらの金器の形式・紋様の多くは中原の伝統様式であるとはいえ、その種類と使い方はむしろ北方地区からユーラシア草原のそれに近く、その影響を一定程度受けていることは間違いない。

秦人が用いる黄金装飾車馬の作り方は、西戎と同じである。張家川馬家塬戦国西戎貴族墓の墓道内には、通常3～4輛の乗車が置かれており、それらは漆塗の絵で彩られた車か木製で装飾の無い車かのいずれかである。車輪の外側を鏤空銅片で飾っているものもあり、それは墓室の前室内に置かれ、金銀錯の鉄棒を骨組として、車両と車輪を金銀箔を用いた花飾りや動物・鍍金銅泡・金銀帽などで飾っている（甘肅省文物考古研究所ほか2008）、異常に豪華で珍しいものである。この種の方法の最高峰がすなわち「金根車」である。『後漢書』輿服志に「秦 天下を併はせ、三代の礼を闕し、殷の瑞山車を金根の色と曰ふこと或り」とある。劉昭注には、「殷人の以て大路と為せしを、是に於て始皇 金根の車と作す。殷に桑根と曰ひしを、秦 改めて金根と曰ふ」とある。『乘輿馬賦』の注には、「金根、金を以て飾と為す」とある。殷後期の馬車で金銀で装飾されたものは見つかっておらず、金根車は秦漢の基準における最高の乗輿車輛で、帝王の馬車であり、秦の車馬の伝統の上に、周の乗輿制度を参考として、西戎の車制度が混じり合って生み出された車種であり、殷の車馬とはあまり関係性がない。

（3）鉄器

紀元前14世紀よりもさらに早い時期に、西アジアではすでに製鉄技術が習得され、段階的に周辺地域に伝播した。中国国内の新疆地区では遅くとも紀元前1000年以前には製鉄が開始され、紀元前8世紀から6世紀に至ると、鉄器の応用はすでに相当普及していた。多くの学者が新疆の鉄器は西アジアから伝播したもので、中原内地の製鉄技術は多くの研究者が新疆から河西回廊を経て伝わったものであると考えている（唐1993・趙_レ1996）。

中原地区の春秋中期より前の製鉄製品は甘肅省東部・関中と河南省西部から主に出土しており、礼県大堡子山1号車馬坑内の「鏽のひどい鉄製品」、甘肅省靈台县景家莊M1号墓出土の銅柄鉄劍（劉・朱1981）、隴県辺家莊春秋前期墓出土の銅柄鉄劍1点（張1993）、陝西省長武碾子坡春秋前期のH314号土坑出土の鉄刀1点（中国社会科学院考古研究所2007）、陝西省韓城梁帯村M27号墓出土の鉄刃銅削1点と、鉄刃銅戈1点（陝西省考古研究院ほか2010）、三門峡虢国墓地M2001号墓出土の玉柄鉄劍1点と銅内鉄援戈1点、M2009号墓出土の鉄葉戈一点が含まれる。年代観に諸説ある虢国墓地以外は、すべて春秋前期に属する。三門峡M2001号墓出土の小子吉父甗について王恩田は、被葬者は虢公忌父であり、年代は紀元前760～655年で春秋前期に属し、これまで言われていた西周後



1. 秦子銅盃 2. 円頂山銅盥 3. 円頂山銅壺
4. 大堡子山木芯金虎 5. 単獾紋瓦当 6. 単虎紋瓦当

図6 遺物と紋様装飾

期ではないとしている（王^恩2012）。

以上の数例の中に、甘粛省と関中西部のものは秦に属し、韓城のものは芮に属し、三門峽のものは虢に属す。芮・虢の鉄器は君主クラスの墓にのみ見られ、点数はごく僅かであり、出土することは珍しい。秦国の鉄器は秦公大墓の車馬坑だけでなく、鼎を5つ副葬する墓（辺家荘）と鼎を3つ副葬する墓（景家荘）においても見られ、鉄器が副葬される被葬者の範囲は非常に広い。春秋中後期の秦国では鉄器はしばしば出土し、礼県円頂山98LDM2号墓出土の鍍金透彫銅柄鉄劍（甘粛省文物考古研究所ほか2005）、鳳翔県秦公一号大墓出土の鉄鐘・鉄錘・鉄斧、孫家南頭墓地出土の鉄劍・鉄刀・鉄刃削（陝西省考古研究院ほか2013）、雍城馬家荘宗廟遺跡出土の鉄錘（甘粛省雍城考古隊1985b）、宝鷄市益門村M2号墓出土の鉄劍・鉄刀を含む20点の鉄器などがあり、種類も点数も列国の中で群を抜いていることは言うまでもない。そのため、秦国の鉄器は東方の国々からではなく、西方から伝わってきた可能性が高い。

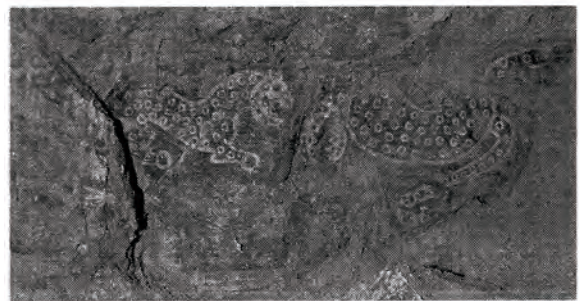


図7 毛家坪201号坑 車輿彩絵図

製鉄技術が西から東に向かって中原へ伝播する過程で、西北の外れに位置する秦国が

真っ先に影響を受けた。当然ながら新疆と隴東の間の伝播の中間地点を探す必要がある。河西回廊の東端の沙井文化の住居址と墓からは多数の鉄器が出土しており、錘・鑄・刀・劍・錐形器などの種類があり、具体的に出土遺構ごとの具体的な時期区分はまだ困難であるが、年代は紀元前9～5世紀である（甘肅省文物考古研究所2001）。近年、甘肅省臨潭陳旗磨溝遺跡M444号墓とM633号墓から鉄の延棒2点と、鉄鑄塊1点が出土し、化学分析の結果、鉄の延棒は肌焼き鋼を精錬して鍛造したものだということが判明し、墓の年代は紀元前1430～1260年と測定された。これはつまり、中国領域内で人の手による製鉄製品が出現したのが紀元前14世紀にまで遡ることを示している（陳ほか2012）。磨溝遺跡の鉄器が外来品なのか現地で製作されたものなのかは、なお定かではない。しかしこれらの鉄器は寺窪文化前期の遺構から出土していて、その寺窪文化は歴史上、西戎に属しており、この地の戎人が早くから製鉄製品や製鉄技術に触れていたことは明らかである。これらの状況から、秦国が西戎を経由して製鉄技術を学んでいたことは、あり得ることだといえる。

（4）動物の造形と紋様

西周から春秋期の秦の装飾芸術の題材は大きく2つに分けることができ、1つは西周中後期の青銅器の伝統紋様を受け継ぎつつも変化していく、窃曲紋・垂鱗紋・重環紋・波曲紋・鳥紋・吐舌龍紋などである。春秋中期以降、虺龍紋から変化した蟠虺紋が最も流行し、スタイルは緻密でこまごまとしており、銅器・玉器・陶器そして漆器などいたるところで使用されている。もう1つは、写実的なスタイルの動物意匠で、生き生きとして活気のある造形で、素朴でかわいらしく、銅器の付属品や漆皮彩絵などがある。例えば春秋前期の秦子盃は、蓋の頂部の臥した鳥を除いて、蓋と耳の連結部と肩部に上向に顧首し尾を巻いた虎・雄牛が、流嘴にもまた伏せた虎が鑄出されている（梁2006）（図6-1）。春秋中期の礼県円頂山の銅器では、方壺・盃・盥・方盒の蓋上部・口縁下部・肩部・底部いずれにも多数の動物の体全体を象ったものを鑄繋いでおり、虎・鳥・熊などがある（甘肅省文物考古研究所ほか2005）（図6-2,6-3）。これらは西周青銅器では見られないもので、新鮮な感覚を与えるものである。甘肅省甘谷毛家坪K201号坑の車輿板の外側には彩絵の豹・虎・馬・兔・鹿などの動物が見られ、粗い線で輪郭が描かれ、その内側は細く小さな円で充填されており、虎と豹は牙をむき出して無邪気でかわいらしい顔つきをしており（図7）、兔と鹿は自由に駆け回っている（梁・侯2014）。これらの動物意匠は実際の生活をモデルにしている。それは秦人は牧畜が得意で、頻繁に狩りを行ない、豪快で武術を重んじており、戎の性格がまだ残っているため、殷周青銅器の荘嚴な伝統風格に満足せず、彼らの好む動物を飾り、一風変わった芸術効果を得たものである。

戦国以降、社会の気風は日に日に解放的になり、秦の芸術の中の自然主義の傾向はさらに発展し、雍城遺跡出土の動物紋瓦当にそれが集中的に体现されており、その種類は鳳凰紋・単（あるいは双）獾紋・単虎紋・鹿紋・虎鹿獸紋・鹿蛇紋・虎雁紋・鹿蟾狗雁紋、豹鹿魚紋、獵人刺虎などがある（陝西省考古研究院ほか 2013）。これらの瓦当の紋様には、単体の動物、複数の動物、人と獸が格闘する様などがあり、無紋の瓦当とも異なっている。新鮮かつ自然な、東方諸国とは異なる審美的な趣をもつこれらを宮殿建築の軒先に並べ、目を楽しませたのである。

劉莉はかつて雍城の瓦当の動物紋と甘肅省・内モンゴル自治区の岩壁画および北方動物の紋飾の類似性を指摘した（劉莉 1983）。例えば耳1つと脚2本の側面像や、虎の体の「V」字形紋、勾玉形の爪、虎と鳥獸が戦う様子、2匹の獸が首を交差させる構図などで、これらから、秦の瓦の動物紋は姜・胡などの民族の伝統芸術に遡ると考えられる。その中の「V」字形紋は獾や虎の体、頸部にしばしば見られ、また大堡子山出土木芯金虎の体部の朱彩絵にも用いられている。秦の各種動物の意匠は北方文化の最も主要な装飾の題材で、長城に沿って東端は夏家店上層文化から西端は卡約文化まで、いずれにおいても兵器と工具に装飾あるいは彫刻することが流行した。秦国は農耕と遊牧の交流地帯に位置していることから、周辺の戎狄集団の動物紋芸術を吸収し自分たちの中に持っていることはごく自然なことだといえる。

（5）墓室の壁龕と周溝

清水県李崖遺跡の西周墓の中で唯一壁龕を持つ墓（M17号墓）では、龕内には縄紋罐が副葬されていた。西周後期以降、秦の士大夫クラスの墓は総じて壁龕を伴う。龕は天井がアーチ状の長方形で、殉葬者を配置するために用い、1つの龕につき通常は1人を殉葬し、まれに2～3人が殉葬される。西山坪 M2003号墓（鼎を3つ副葬する墓）の南、北の壁龕内にはそれぞれ1人殉葬されており、礼県円頂山 98LDM2号墓（鼎を7つ副葬する墓）の北、東、南の3つの龕内には7人が殉葬され、殉葬者は漆塗りの木棺に納められていた。98LDM1号墓（鼎が5つ副葬されている墓）は南、北壁の3つの龕内にそれぞれ1人ずつ殉葬されていた（甘肅省文物考古研究所ほか 2002）。鳳翔県孫家南頭 M191号墓（鼎を5つ副葬する墓）の四方壁の6つの壁龕内にそれぞれ1人ずつ殉葬されていた。M126号墓（鼎を5つ副葬する墓）の5つの壁龕内にはそれぞれ1人が殉葬されていた（陝西省考古研究院ほか 2013）。毛家坪 M2111号墓（鼎を3つ副葬する墓）の南、北の龕内にはそれぞれ1人が殉葬されていた。雍城近郊の貴族墓では壁龕内に殉葬する現象が突出して見られる。注意が必要なのは、秦公大墓では二層台の上と墓道の埋土内に殉葬者が埋葬され、壁龕はないことである。数は非常に多い庶民の墓には、殉葬はされないため、壁龕もない。

殷墓に壁龕が伴うことは少なく、殉葬者は多くが二層台上に埋葬されている。例えば、殷墟西区で発見された 939 基の墓のうち 17 基に小龕が伴っており、副葬品が配置されているが（中国社会科学院考古研究所安陽工作隊 1979）、割合は極めて低い。周墓もまた壁龕を伴うことはまれであり、1980 年代の豊西張家坡で発見された 340 基の西周堅穴墓にはすべて壁龕はない（中国社会科学院考古研究所 1999）。殷周時期、隴山の東西両側の姜戎文化の墓制で壁龕が流行した。長武県碾子坡のように先周後期に相当する墓の約半数が壁龕を伴っており、龕内には土製鬲が置かれている（中国社会科学院考古研究所 2007）。宝鷄高家村の 19 基の劉家文化の墓では、うち 14 基の墓が壁龕を伴っており、中に土器が置かれていた（高ほか 1998）。近年発掘された宝鷄石鼓山の西周墓には、東・南・西の三方の壁の 6 つの壁龕内から大量の青銅器が出土しており、被葬者は姜姓の貴族である可能性ある（石鼓山考古隊 2013）。合水県九站の 79 基の寺窪文化の堅穴墓の中で、頭龕を伴うものは 61 基で、割合は高く、龕内には土器のセットが置かれていた（北京大学考古系ほか 1997）。このほかに、莊浪徐家碾の寺窪文化では 6 基の墓が脚龕を伴っていた。龕内には多数の子供が殉葬され、殉葬者は僅かに体を屈めるかあるいは腹ばいに臥しており、殉死させたあとに龕内に埋葬したものであると考えられる（中国社会科学院考古研究所 2006：160）。秦の貴族墓が壁龕を伴うという風習は姜戎文化の影響を受けていることは明らかであるが、ただし壁龕の主要な用途は貯蔵することから殉葬者を埋葬することへと変化している。

墓の周溝は墓域の範囲の指標となる境界の溝で、東周秦国陵区の伝統的な施設として、雍城秦公陵园、芷陽秦東陵、咸陽塬戦国秦陵のすべてに見ることができる。このほかに、山西省侯馬喬村、河南省三門峡の戦国秦の墓地からも発見されている。2013 年宝鷄太公廟の鐘や罇の埋納坑の東北をボーリング調査した際に秦公大墓 1 基と車馬坑 1 基が発見され、その付近からは陵园の区画溝もまた発見された。大墓の被葬者は秦の武公で、秦陵で区画溝を掘る習慣が春秋前期から始まっていたことがわかる（陳黎 2014）。秦の影響を受けたからか、東周時期のその他の国家のいくつかの墓でも周溝を掘り始めた。浙江省紹興印山越王陵では、その四面に規則性のある形をした環壕があり、それぞれの面の中段に通路が残っており、年代は戦国前期に属する（浙江省文物考古研究所ほか 2002）。また侯馬喬村のいくらかの殉葬者を伴う周溝墓のように、年代が戦国中期で、魏に属するものもある（梁 2009）。1981 年青海省循化県蘇志村で発掘された卡約文化中期から後期の 2 基の墳丘墓は、墳丘の両側にそれぞれ 1 本の弧を描いて湾曲した周溝があり、溝内と墳丘の頂上に棺が埋められ、年代は西周時期とおおよそ一致する。兪偉超は墳丘と周溝は西北青銅器文化が中原に影響を与えたものであり、秦墓の周溝は西北の姜戎文化の要素のひとつに由来すると考えている（兪 2002b）。



1. 王家村 2. 西撥子村窖藏 3. 甘肅博物館 4. 甘峪 5. 東社

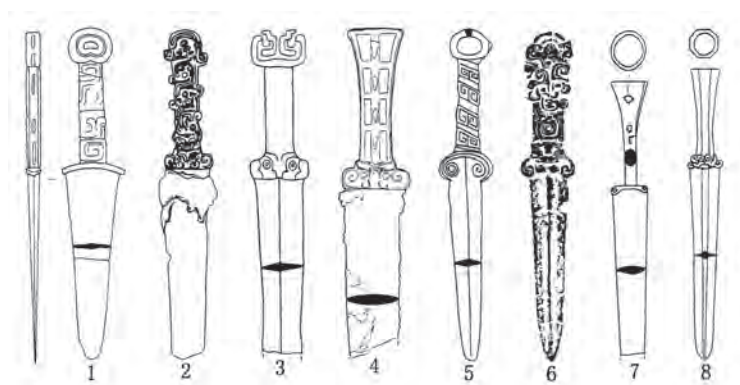
図8 銅鍑

(6) 銅鍑と短剣の使用

銅鍑は2つの立耳を持ち深腹の、圈足あるいは三足の炊食器の一種で、中国北方およびユーラシア草原の遊牧民の間で広く流行した。近年各地で収蔵されている春秋前期の秦鍑が公開され、上海博物館所蔵の2点、カナダ所蔵の1点、アメリカ所蔵の1点、甘肅省博物館所蔵の1点があり(図8-3)、学界の注目を集めている。これらはいずれも縄状の立耳が口唇上に付けられているか、あるいは耳の付け根が蛇頭形を呈したものが口縁の外縁に貼り付けられており、縁の下部が獣目交連紋で装飾され、深腹で、腹部は波曲紋かあるいは双層垂鱗紋で装飾され、幅広い紋様帯の間に凸状縄文があり、ラッパ形の圈足を持つ。装飾の様相は大堡子山秦公器と一致していることから、一般的に秦器であるとされる(李朝 2004)。1979年宝鷄市甘峪の1基の秦墓から出土した銅鍑は、耳上に円柱状の突起があり、無紋であり(高・王 1988)、器高は21~24cm、口径は18~22cmである(図8-4)。秦が雍城に遷都し東に向かって発展していくのに従って、鳳翔県付近では銅鍑が発見される。例えば鳳翔東社(陝西省雍城考古隊 1984)(図8-5)、東指揮村(劉朝 1987)、侯家莊(趙叢 1991)から出土しているものは、形は様々で比較的小さく、器高約7cm、腹部は浅く、圈足は歪曲しており、その年代は春秋後期から戦国前期である。

中原地区で出土した、秦鍑より早い時期のものとしては岐山県王家村出土の銅鍑がある。立耳の頂端に乳状突起があり、腹部は深く、球状の底で、短い圈足、耳部は回紋で装飾され、器の高さは39.5cm、口径は37.6cmで(図8-1)、鍑の内部には蓋柄直刃剣が1点と銅鑿が1点置かれており(龐・崔 1981)、年代は西周後期である。中国北方の蓋柄双刃器は夏家店上層文化において流行し、西周初期から春秋まで続いて見られる(李朝 2011: 62-81)。王家村の剣の両端にある巻くように湾曲した横欄式格は遼西の剣とは異なっているが(図9-7)、ただしラッパ形の蓋柄、柄の上の釘孔、直刃の器形は類似しており、後代の「鉞」に類似した長い柄の刺兵を装着しており、周文化には見られない、北方草原文化の雰囲気を持つものである。このほかに、北京延慶西撥子村の夏家店上層文化の窖藏にも銅鍑があり、大きな口縁、深腹で、円形の底部は一部欠損しているが、耳部には凸稜紋があり、器の高さは27cm、口径は38cmである。鍑内には三足で球状の底の銅鼎・柄の部分

が三角鋸齒紋の銅匙・辺縁に放射線紋の銅泡などがあり（北京市文物管理处 1979）、年代は两周の移行期とされる（図 8-2）。この 2 点の銅器はともに北方の器形の特徴を持っており、そのため研究者たちは、秦鍔には北方文化の影響が表れており、秦と戎との交流が関係していると認識している（滕 2002）。王家村と西撥子村銅鍔はすべて実用品であり、器形は比較的大きく、長期にわたって使用したため、修復した痕と煙の煤が見られる。秦の春秋前期の銅鍔には煤の付着がなく、中原の伝統的文様装飾が加えられており、すでに礼器として作られるようになっており、春秋中期から後期にはさらに小型の明器に変化する。その間の変化の過程は比較的明らかである。



1. 西山坪 2003 号墓 2.A 型 (辺家荘) 3.B 型 (譚家村 M24:2)
4.C 型 (景家荘 M1:4) 5. 柴灣 4 号墓 6. 宇村 1 号墓 (M1:8)
7. 王家村 8. 齊故城 1 号墓 (M1:1)

図 9 銅短劍

扶風県下務子村出土の西周後期の師同鼎の銘文に「孚（俘）戎の金冑三十、戎の鼎二十、鋪五十、鋌（劍）二十」とあり、学者たちは「鋪」（鬪）がすなわち「鍔」であると考えている（李_平 1983）。王家村と西撥子村の窖蔵の鍔は戎式の鼎・劍と供伴するが、これはおそらく偶然ではない。

現在、出土地点が明らかな秦の短劍は 30 点近くある。張天恩はかつて秦国領域内の春秋時期の短劍を体系的に整理し、3 つの型式に分類した。A 型は、格・茎・首にはすべて透かしの蟠螭あるいは蟠虺紋が施されているものである（図 9-2）。B 型は獸面格、首は蟠虺紋が施され、茎部は多くの場合紋様がない（図 9-3）。C 型は、獸面格、首と茎柄は明確に分かれており、曲腰ラッパ形を呈している。張天恩はこれらの早い時期から遅い時期までの変化の傾向をまとめ、それは獸面紋の輪郭が円形から正方形に変化し、格部の装飾が単層から二層になる過程であり、これは秦文化の基本要素であるので、これを秦式鉄劍と呼び、その起源を西周時期の柳葉型短劍であるとした。また A 型劍の直接的な起源は、甘肅省寧県宇村の西周後期の獸紋柄短劍にあるとした（張 1995）（図 9-6）。もちろん学界ではこれに反対する意見もあり、たとえば陳平はこの類の劍は北方草原地帯の直刃匙首式短劍の大きな系統に属するが、しかし中原の伝統的な紋様と工芸を採用したものであり、北方の戎狄集団から直接秦国に伝来したものであると考えている（陳_平 1995）。また楊建華は秦のこの類の獸面格劍を花格劍と称し、その起源は北方の文化に関係があり、中央ユーラシア草原まで遡ることができる（楊 2013）。

秦の短剣を研究する際に注意すべき点は3つある。1点目は、偏茎柳葉形剣は西アジアに広く分布し、年代は紀元前2000年紀前半を下らず、中国領域内の柳葉形短剣より早い年代のものであること、なおかつ、その形態が近似しており、西アジアから中国内陸への伝播の経路があった可能性は排除できないことである（李剛2011:60）。かつて学者の中には周剣の「輕呂」の名称が匈奴の「徑路刀」の名称から転音したものであり、周人の短剣は北方の遊牧民に由来するものであると考える者もいた（兪2002）。秦の短剣は西周の柳葉形剣に起源を持つとはいえ、その由来から論じれば、北方集団との関係性は排除できない。2点目は、秦式短剣のC型剣は、茎・首部が一体となって連なっており、ラップ形の柄で、柄は中空であるという点である。単に剣の柄の形態だけを見ると、C型剣は上述の岐山県王家村出土剣や遼西剣（双刃器）の銚柄と非常に似ており、その起源における関係は明らかで、これらの銚柄の形態の特徴を吸収し、さらに獣面格を改変して付加したものであろう。類似するものとして、臨淄齊故城M1号墓出土の獣面格剣があり、筒柄は中空、内は円形で、外は八菱形を呈し、首部近くはだんだんと太くなるラップ形を呈し（図9-8）、年代は両周の境で、報告者は矛であるとしている（齊国故城遺址博物館ほか1988）。3点目として、現在のところ最古の秦短剣として知られるのは礼県西山坪M2003号墓出土の短剣だが、この剣は環首であり、内圏は比較的小さく、首上の装飾の下端の内側の隙間は口唇紋があり、茎の断面は楕円形で、三節に分かれており、正面には巻曲の勾連紋の痕が残り、側縁には細長い孔があり、弧形に湾曲し、剣身は柱脊であるという点である（図9-1）。この剣と春秋時期の秦式短剣は発展関係はなく、中原の西周剣にもその起源を見出すことは出来ないが、西周時代の秦の貴族墓に突然出現する。それに近似した剣が、甘肅省中部の沙井文化の墓の中で発見された。永昌県柴湾M4号墓出土の銅剣は、環首、茎が分かれており、上部は四条斜方格勾連紋で装飾され、弧形に湾曲し、格下の両端が内巻の勾雲紋で、剣身の断面は菱形で（甘肅省文物考古研究所2001）（図9-5）、西山坪剣との共通性がはっきりしている。西山坪剣は沙井文化に起源を持つ可能性がある。中国の領域内では環首剣の出土は少なく、朱開溝遺跡でかつて1点出土し（M1040号墓:2）、年代はおおよそ殷代中後期であるが、そのあとは滅多に見られない。ただしロシアの領域内のミヌシンスク盆地では環首剣出土数が多く、あるものは茎部に横箍分節・帯条形孔を持ち（李剛2011:55）、西山坪と類似している点がある。このように、中国周代の環首剣と国外の環首剣との関係は、考慮すべきである。以上の3つの視点から考えてみると、秦の短剣はそれのみで整った系統を成しており、中原の周の剣に起源があると見るのは、おそらく妥当ではない。秦の短剣を北方の短剣の系統に分類することも、秦の短剣自体の特徴を無視した行為である。北方草原文化と中原の伝統が結合した産物であることは言うまでもなく、あるいは戎華合璧の結果であるともいえるだろう。

北方草原・西南夷地区を除いて、秦国はもう1つの短剣が比較的集中的に出土する地域である。西周時期の中原地区出土の短剣は約40点であり(張2001)、秦剣よりもやや多く、ただしその分布範囲は西は隴東から東は燕山までと、分布の密度は秦の短剣より遥かに低い。水平方向で比較すると、秦国短剣が出土する頻度も確率は、東方列国より遥かに高い。天馬-曲村晋国墓地ではこれまで約600基の墓が発掘されているが、短剣は1基の晋侯墓(M33号墓)からわずか1点が出土しているだけである。侯馬上馬墓地では1373基の東周晋墓が発掘されているが、短剣は1点も出土していない。三門峡虢国墓地では、M2001号墓から玉柄鉄剣1点、M2011号墓から円首銅剣1点が出土するのみである。春秋時期秦国の3～7点の鼎が副葬されている貴族墓の約半数で短剣が出土し、そのうち女性墓を除いて、すなわち元士以上の階級の男性貴族の墓ではほとんどみな短剣が出土している。銅鼎が1点あるいは土製鼎が3点副葬されている中下士クラスの墓でさえも短剣が副葬されており、礼県円頂山98LDM3号墓(甘肅省文物考古研究所ほか2002)、甘谷毛家坪M1045号墓などがある(梁・侯2014)。これらの現象は東方国家ではあまり見られず、秦の貴族墓で剣を副葬する風習が相当流行したことを示している。

西周から春秋時期までの中原地区の戦争では戦車を主として、戈・矛および弓・矢が広く使用された。短剣は近接戦の状況下でその作用を発揮するものであり、そこでは使用される機会が多くなかったため、流行しなかったのである。しかしながらこの時期の、東北から西南の農牧合流地帯では、短剣は長い間普遍的な器物であり続けた。童恩正はかつて、中国の東北から西南周辺地に半月形の文化伝播地帯が存在すると指摘した。そこでのいくつかの共通要素の1つとして青銅短剣を挙げており、伝播帯が発生する前提は類似した生態環境と半農半牧の経済特徴であるとした(童1987)。注目すべきは、秦国はちょうどこの伝播帯の中ほどに位置していることである。秦人の牧畜業の発展段階について、礼県西山坪秦墓の人骨の歯の摩耗および虫歯の分析結果によって、早期秦人の食生活は雑食で肉食を主とし、経済形態は農牧兼業の方式であったことがわかっている(尉ほか2009)。短剣は近接の武器であるだけでなく、日常生活の中で皮を剥ぎ、肉を食べるための道具であり、携帯するものである。秦人の生業経済は西北の戎狄のそれに近く、短剣を用いる風習は生活習慣によるものである。

5. 早期秦文化の形成

歴史学研究において秦人の種族の起源については、長い間東來說と西來說の論争がされてきた。東來說は、秦人はもとは東方の民族であったが、西遷して甘肅にやってきただけ

だとするものである。秦の祖先玄鳥の降誕伝説や、嬴姓の一族はもともと多くが東方に居していたこと、秦人は帝高陽顓頊の末裔であると自称していること、少昊などを祀ることなどをその理由とする。西來說は、秦人はもとより隴西に土着していたか、あるいは西戎の一系統であるとするものである。秦の祖先が「西戎に在りて、西垂を保」ったこと、秦と西戎の通婚、秦の洞室墓と屈葬などをその理由とする。研究者の多くは文献に基づいて立論していて、比較してみると「東來說」の方が系統だっており、その理由も十分である。

秦人が大きく発展していった過程は、次のようである。最初は比較的小規模なグループ、おそらくは嬴姓の一族のみであったのが、その後異なる地域・文化背景を持つ集団がその中に入り込み、雪玉のように転がれば転がるほど集団が大きくなっていき、やがて秦人という共同体が構成されたのである。学术界でいう秦人の一族の起源とは、一般に支配階層である嬴秦宗族の起源の問題を指す。

ここで述べるべきは、考古学から見た秦文化の起源と、歴史学から見た秦人の一族の起源、この2つは関連性があるものであり、また区別するものでもある問題である。ひとつの民族の来歴およびその固有の伝統は、自ずとその遺跡に鮮明に刻印されるものである。しかし遺跡の各種要素の出現原因はより複雑で、集団の構成と関係がある可能性もあり、また異なる集団間の往来や文化交流の結果である可能性もあり、それらが全て一族の由来の問題に関係しているわけではないのだ。考古学文化は物質遺存の形で存在し、包含される各種の要素はそれぞれその起源があり、その中のいくつかの要素だけが集団共同体の起源と関係があるのである。

次の3つの要素の中で、秦人の起源を最もよく代表しているものはどれだろうか？

第1の要素は、殷文化に由来する要素で、最も代表的なものである。これらは嬴秦の一族の出自が東方で、殷王朝との関係が密接であり、殷文化の影響を深く受けていることを反映している。この要素の多くは葬制習俗に関するものである。葬制習俗はその民族の葬送観念が濃縮されたものであり、最も実益の色味が薄く、強い不変性があり、王朝が交替を経ても社会情勢が不安であっても変わり難いものである。そして往々にして属する集団や、集団の起源を推測する有効な指標となる。さらにこの要素は、西山型の段階において集中して上位階層墓に出現し、それは嬴秦の社会地位を示すものである。

李崖型は、甘粛省東部で発見されている中で現在最古の秦文化の遺跡である。嬴秦の西遷の初期段階を反映しており、葬制と器の使い方では、まだ殷の遺風を濃厚に留めている。李崖遺跡の発掘によって、考古学の観点から秦人東來說が実証されたといえる。墓は腰坑や犬の殉葬、殷式土器をもつ割合が高い。それらは西周遺跡では滅多に見られないものであり、同時期の周人墓では遥かに及ばない割合である。これらの要素は、嬴秦が西周期に他からの影響を受けたことによるものではない。西周時期は周人が統治階層とな

り、文化の正統と主流を代表していたため、もし嬴秦がもともと西方の民族であったなら、周文化を捨てて、弱体化した殷遺民の旧習をわざわざ学ぶはずがない。このことからいえば、嬴秦は広義の殷遺民に属し、早期秦文化の李崖型は、実は殷遺民の文化の1つなのである。

第2の要素は、周文化に由来する要素であり、秦人が宗周礼楽文明を継承していることを表している。嬴秦はもともと殷に仕えており、悪来が紂王の残虐な行ないを助けたことにより、武王に誅された。その子孫の地位は低くなり、造父の一族に隷属する身分へと没落し、もとの嬴姓を失い、造父の一族の姓である趙姓に改姓した。西の隴右へ西遷した後、劣悪な生存環境に直面した。そこでは発展し、周王朝の許しと支援を得ることが非常に重要であった。秦仲は周の宣王に大夫として封ぜられ、周の上流社会に身を置き始めた。秦の莊公は宣王の援助による7,000の兵馬を頼りに、ようやく西戎を一举に打ち破ることができ、隴右において周王室による軍政管轄権を行使した。秦の襄公は平王の東遷を護送した功績があったため、諸侯に封じられ、国を立てることが出来た。この過程において、秦人は附傭という下級から大夫にまで出世し、さらに諸侯までなるという身分の転換を経験し、身分を改めるにふさわしいシンボルが必要となった。それはすなわち車服・礼器・宗廟・宮廷のなどの待遇規則であり、このようにして周王室の政治圏内に入ることができ、王室の信頼を得て、その他の諸侯国との交易の資格を得たのである。これによって秦人は系統立った宗周礼楽制度を使用できるようになり、その発展と地位に関わる、より強固な政治的意義を得たのである。

周の礼制を学ぶとともに、秦人は器用制度の面においても、殷から学んだ時勢に合わない古い伝統を捨て、より周文化に近づき、李崖型から西山型への文化の転換を実現させた。

第3の要素は、屈葬の葬制、壁龕・周溝のある墓形、金製の奢侈品、渡来品の鉄器、動物紋の装飾、銅鍍・短剣で、これらはおそらくその当初は外部から伝来したものであった。そのうち屈葬は下級社会で流行し、その他の要素は主に上級社会に見られる。秦はその建国の過程において、嬴秦貴族が統治階級へと出世していった一方で、その管轄区域の臣民の構成はますます複雑になっていき、種々様々な戎人と周人を含むようになった。これらの人々と嬴秦は秦人という1つの集団として共同体を構成した。秦の貴族墓の伸展葬と平民墓の屈葬の差異は、二者の民族の起源の違いを暗示しており、同時に早期秦文化の地縁上の特性を表している。秦国は西北の辺境に位置し、同時に古のシルクロードの東部でもあり、その場所で農・牧の経済が重なり、古代民族が入り混じっていったのであるから、その文化に西戎とユーラシア草原の要素が含まれるのは必然的であった。嬴秦の一族は東方から来たとはいえ、隴右で200年以上に亘って統治する中で、この土地に深く根を張り、日々を重ね、我が耳で聞き我が目で見て、生活習慣や審美趣味などについては在地の西戎

と近しくなっていた。それは例えば、黄金や動物紋への嗜好や、短剣を帯びる習俗などに表される尚武の風などである。

西周中期の秦文化の中では、第1の要素がまだ優位を占めている。西周後期から春秋前期に至ると、第2・第3の要素が明らかに優勢となり、第1の要素は貴族の埋葬行為に見られるだけとなる。ここに至りついに、これら3つの要素は互いに溶け合い、有機的に結合し、ある種の安定した文化の構造を形成し、全く新しい様相の秦文化が形成されたのである。早期秦文化は、実はある種の殷遺民文化を基礎としており、周文化と西戎文化の要素を大量に吸収して形成されたものなのである。

附記 本研究は教育部人文社会科学重点研究基地項目（項目番号：14JJD780004）の助成による成果である。

註

- (1) ただ銅敦が墓から出土する、毛家坪 M1048 号墓のような例もあるが、列鼎と組み合わされているのは、依然として列簋である。
- (2) 陳夢家は號李子白を、携王政権を補佐した號公翰であるとしている。陳夢家 2004『西周銅器断代』中華書局参照。
- (3) 「西戎」は子午嶺以西の古代少数民族を指す。中国北方地域ないしユーラシア草原地帯にいた集団の一部であり、様々な民族から構成され、長城地帯の西部を拠点とした。そのため、これらの要素は甘肅・青海地区の古代文化由来かあるいは、ユーラシア草原に由来する可能性もある。

訳註

- (1) 史記の解釈は、基本的に吉田賢抗 1986（『新釈漢文大系第 38 卷史記（一）』明治書院）に従った。
- (2) 原文では「輶」字だが、ここでは同義の「輶」字を用いた。
- (3) 小孟鼎銘文についての解釈は、白川静 1966（「六二、小孟鼎」『白鶴美術館誌』第十二輯）に従った。この部分の青銅器銘文には、「入口門」とあり、口は不鮮明なため、解釈には諸説ある。陳夢家は「南」とし、于省吾・郭宝均は「王」とする説がある。
- (4) 白川 1966 によれば、青銅器銘文は「以獸進、即大廷」とであるとされるが、欠損箇所があり「以獸進」についてはそのように読んでよいか不明という。本文の引用箇所には、冒頭の「以」が抜け落ちているが、ここでは「以」を入れて解釈した。
- (5) 白川 1966 は、青銅器銘文を「入三門、即立中廷、北嚮」としており、比較すると本文の引用箇所では「位」が抜けているが、ここでは白川に従った。
- (6) 李純一 1996（『中国上古出土樂器総論』文物出版社）によると、西周中期から春秋前期の編甬鐘のうち 1、2 番目の大きさの鐘はひとつの鐘から 2 つの音を発することはなく、第二基音を示す小鳥紋もまた見られないという。

- (7) 秦公鐘銘文の解釈は白川静 1979 (「金文通釈一六、秦公鐘」『白鶴美術館誌』第五〇輯) に従った。
- (8) 原文では「欧羅巴人」。コーカソイド、西ユーラシア人、いわゆる白人種を指す。ここでは「コーカソイド」とした。
- (9) スキタイ人の一派。

参考文献

- 尉苗・王涛・趙叢蒼・陳靚・王昌燧 2009 「甘肃西山遺址早期秦人的飲食与口腔健康」『人類学学報』第 28 卷第 1 期
- 印群 2012 「論円頂山秦早期墓地車馬坑之殷文化因素」『蘇州大学学報 (哲学社会科学版)』2012 年第 2 期
- 尹盛平 1986 「西周蚌形人頭像種族探索」『文物』1986 年第 1 期
- 王恩田 2012 「「二王開立」与虢国墓地年代上限—兼論一号・九号大墓即虢公忌墓与虢仲林父墓」『華夏考古』2012 年第 4 期
- 王暉 2000 『商周文化比較研究』人民出版社
- 王輝 2013 「甘肃發現的西周時期「胡人」形象」『考古与文物』2013 年第 6 期
- 王国維 1959 『觀堂集林』中華書局
- 郭宝均 1981 『商周銅器群綜合研究』文物出版社
- 河南省文物考古研究所・三門峡市文物工作隊 1999 『三門峡虢国墓地』第一卷 文物出版社
- 韓偉 1985 「馬家莊秦宗廟建築制度研究」『文物』1985 年第 2 期
- 韓偉・程学華 1993 「秦陵概論」『考古学研究』三秦出版社
- 甘肅省文物考古研究所 2000 「礼県大堡子山秦公墓地及有関問題」『文物』2000 年第 5 期
- 甘肅省文物考古研究所 2001 『永昌西崗柴湾崗—沙井文化墓葬發掘報告』甘肅人民出版社
- 甘肅省文物考古研究所・張家川回族自治州博物館 2008 「2006 年甘肃張家川回族自治州馬家塬戰国墓地發掘簡報」『文物』2008 年第 9 期
- 甘肅省文物考古研究所・礼県博物館 2002 「礼県円頂山春秋秦墓」『文物』2002 年第 2 期
- 甘肅省文物考古研究所・礼県博物館 2005 「甘肃礼県円頂山 98LDM2・2000LDM4 春秋秦墓」『文物』2005 年第 2 期
- 牛世山 1996 「秦文化淵源与秦人起源探索」『考古』1996 年第 3 期
- 高次若・劉明科・李新泰 1998 「宝鷄高家村發現劉家文化陶器」『考古与文物』1998 年第 4 期
- 高次若・王桂枝 1988 「宝鷄县甘峪發現一座春秋早期墓葬」『文博』1988 年第 4 期
- 吳鎮烽・尚志儒 1981 「陝西鳳翔高莊秦墓地發掘簡報」『考古与文物』1981 年第 1 期
- 黄展岳 1983 「殷商墓葬中人殉人牲的再考察」『考古』1983 年第 10 期
- 山西省考古研究所・北京大学考古文博学院 「山西北趙晋侯墓地一号車馬坑發掘簡報」『文物』2010 年第 2 期
- 山西省考古研究所侯馬工作站 1987 「侯馬程王路建築群遺址發掘簡報」『考古』1987 年第 12 期
- 山西省文物工作委员会普東南工作組・山西省長治市博物館 1964 「山西長治分水嶺戰国墓第二次發掘」『考古』1964 年第 3 期
- 山西省文物工作管理委員会侯馬工作站 1963 「山西侯馬上馬村東周墓葬」『考古』1963 年第 5 期

山東兗石鐵路文物考古工作隊 1988『臨淄鳳凰嶺東周墓』齊魯書社、

山東省濟寧市文物管理局 1991「薛國故城勘察和墓葬發掘報告」『考古學報』1991年第4期

山東省博物館·臨淄地區文物組·莒南縣文物館 1978「莒南大店春秋時期莒國殉人墓」『考古學報』1987年第3期

周原考古隊 2002「陝西扶風縣雲塘·齊鎮西周建築基址 1999-2000年度發掘簡報」『考古』2002年第9期

邵會秋 2009「東西方文化早期的髮撞與融合—從新疆史前時期文化格局演進談起」『社會科學戰線』2009年第9期

肖春林 1995「殷代的四方崇拜及相關問題」『考古與文物』1995年第1期

徐良高·王巍 2002「陝西扶風縣雲塘西周建築基址的初步認識」『考古』2002年第9期

新疆ウイグル自治區文化庁文物處·新疆大學歷史系文博幹部專修班 1989「新疆哈密焉不拉克墓地」『考古學報』1989年第3期

水濤 1999「從周原出土蚌雕人頭像看塞人東進諸問題」『遠望集』陝西人民美術出版社

齊國故城遺址博物館·臨淄區文物管理所 1988「山東臨淄齊國故城西周墓」『考古』1988年第1期

浙江省文物考古研究所·紹興縣文物保護管理所 2002『印山越王陵』文物出版社

石鼓山考古隊 2013「陝西寶雞石鼓山西周墓葬發掘簡報」『文物』2013年第2期

陝西省考古研究院·渭南市文物保護考古研究所·韓城市景區管理委員會 2010『梁帶村芮國墓地—2007年度發掘報告』文物出版社

陝西省考古研究院·寶雞市考古研究所·鳳翔縣博物館 2013『秦雍城豆腐村戰國製陶作坊遺址』科學出版社

陝西省考古研究院·寶雞市考古工作隊·鳳翔縣博物館 2013「陝西鳳翔孫家南頭春秋秦墓發掘簡報」『考古』2013年第4期

陝西省文物管理委員會 1986「西周鎬京附近部分墓葬發掘簡報」『文物』1986年第1期

陝西省雍城考古隊 1984「一九八三年鳳翔雍城秦漢遺址調查簡報」『考古與文物』1984年第2期

陝西省雍城考古隊 1985a「秦都雍城鑽探試掘簡報」『考古與文物』1985年第2期

陝西省雍城考古隊 1985b「鳳翔馬家莊一號建築群遺址發掘簡報」『文物』1985年第2期

曹瑋 2000「試論茹家莊西周墓地的器用制度—兼論西周後期器用制度的源流」『中國考古學跨世紀的回顧與前瞻』科學出版社

早期秦文化連合考古隊 2008「2006年甘肅禮縣大堡子山祭祀遺跡發掘簡報」『文物』2008年第11期

中國科學院考古研究所 1962『灃西發掘報告』文物出版社

中國社會科學院考古研究所 1999『張家坡西周墓地』中國大百科全書出版社

中國社會科學院考古研究所 2006『徐家碾寺窪文化墓地—1980年甘肅莊浪徐家碾考古發掘報告』160頁

中國社會科學院考古研究所 2007『南邠州·碾子坡』世界圖書出版社

中國社會科學院考古研究所安陽工作隊 1979「1969-1977年殷墟西區墓葬發掘報告」『考古學報』1979年第1期

趙化成 1987「尋找秦文化淵源的新線索」『文博』1987年第1期

趙化成 1996「公元前5世紀中葉以前中國人工鐵器的發現及其相關問題」『考古文物研究—紀念西北大學考古專業成立四十周年文集（1956-1996）』三秦出版社

- 趙化成 2012「甘肅清水李崖遺址」『2011年中國重要考古發現』文物出版社
- 趙叢蒼·王志友·侯紅偉 2008「甘肅禮縣西山遺址發掘取得重要收穫」『中國文物報』2008年4月4日2版
- 張天恩 1993「秦器三論—益門春秋墓幾個問題淺談」『文物』1993年第10期
- 張天恩 1995「再論秦式短劍」『考古』1995年第9期
- 張天恩 2001「中原地區西周青銅短劍簡論」『文物』2001年第4期
- 張天恩 2011「禮縣秦早期金飾片的再認識」『秦始皇帝陵博物院』總第壹輯 三秦出版社
- 陳建立·毛瑞林·王輝·陳洪海·謝炎·錢耀鵬 2012「甘肅臨潭磨溝寺窪文化墓葬出土鐵器與中國冶鐵技術起源」『文物』2012年第8期
- 陳昭容 2003『秦系文字研究』歷史語言研究所
- 陳平 1995「試論寶雞益門二號墓短劍及有關問題」『考古』1995年第4期
- 陳夢家 2004『西周銅器斷代』中華書局
- 陳黎 2014「寶雞號鎮發現一座秦公大墓秦都平陽城顯露端倪」『西安晚報』2014年8月21日8版
- 童恩正 1987「試論我國從東北至西南的邊地半月形文化傳播帶」『文物與考古論集』文物出版社
- 唐際根 1993「中國冶鐵技術的起源問題」『考古』1993年第6期
- 滕銘予 2000「秦文化起源與相關問題再探討」『中國考古學跨世紀的回顧與前瞻』科學出版社
- 滕銘予 2002「中國北方地區兩周時期銅鍔的再探討—兼論秦文化中所見銅鍔」『邊疆考古研究』第1輯 科學出版社
- 杜金鵬 2009「周原宮殿建築類型及相關問題探討」『考古』2009年第4期
- 北京市文物管理處 1979「北京市延慶縣西撥子村窖藏銅器」『考古』1979年第3期
- 北京大學考古系·甘肅省文物研究所 1997「甘肅合水九站遺址發掘報告」『考古學研究』3 科學出版社
- 北京大學考古系·山西省考古研究所 1994「天馬-曲村遺址北趙晉侯墓地第二次發掘」『文物』1994年第1期
- 北京大學歷史系考古教研室商周組 1979『商周考古』文物出版社
- 寶雞市考古工作隊 1993「寶雞市益門村二號春秋墓發掘簡報」『文物』1993年第10期
- 龐文龍·崔玫英 1981「岐山王家村出土青銅器」『文博』1981年第1期
- 馬健 2008「公元前8-前3世紀的薩彥-阿爾泰-早期鐵器時代歐亞東部草原文化交流」『歐亞學刊』第8輯 中華書局
- 馬健 2009「黃金製品所見中亞草原與中國早期文化交流」『西域研究』2009年第3期
- 馬得志·周永珍·張雲鵬 1955「一九五三年安陽大司空村發掘報告」『考古學報』1955年第1期
- 俞偉超 1985a「周代用鼎制度研究」『先秦兩漢考古學論集』文物出版社
- 俞偉超 1985b「連雲港將軍崖東夷社祀遺跡的推定」『先秦兩漢考古學論集』文物出版社
- 俞偉超 2002a「西周銅劍的淵源」『古代的考古學探索』文物出版社
- 俞偉超 2002b「日本方形周溝墓與秦文化的關係」『古史的考古學探索』文物出版社
- 楊建華 2013「略論秦文化與北方文化的關係」『考古與文物』2013年第1期
- 楊建華·張盟 2013「阿爾然大墓在歐亞草原早期鐵器時代的作用—兼論中東部文化的分界」『邊疆考古研究』第12輯 科學出版社

- 楊宝成 2003『殷墟文化』 武汉大学出版社
- 雍城考古隊 1985「陝西鳳翔大辛村遺址發掘簡報」『考古与文物』1985年第1期
- 洛陽市文物工作隊 1999「洛陽林校西周車馬坑」『文物』1999年第3期
- 洛陽市文物工作隊 2011「洛陽體育場路東周墓發掘簡報」『文物』2011年第5期
- 李学勤 1980「秦国文物的新認識」『文物』1980年第9期
- 李学勤 1983「師同鼎試探」『文物』1983年第6期
- 李学勤 1987「小孟鼎与西周制度」『歷史研究』1987年第5期
- 李剛 2011『中国北方青銅器的欧亞草原文化因素』 文物出版社
- 李純一 1996『中国上古出土樂器總論』 文物出版社
- 李朝遠 2004「新見秦式青銅鍪研究」『文物』2004年第1期
- 劉懷君 1987「眉县出土一批西周窖藏青銅樂器」『文博』1987年2期
- 劉得禎·朱建唐 1981「甘肅靈台景家莊春秋墓」『考古』1981年第4期
- 劉莉 1983「戰國秦動物紋瓦当的藝術源流—陝西省考古学会第一屆年會論文集」『考古与文物叢刊』1983年第3輯
- 劉莉 1987「銅鍪考」『考古与文物』1987年第3期
- 梁雲 2006「秦子諸器的年代及有關問題」『古代文明』第5卷 文物出版社
- 梁雲 2008「從秦墓葬俗看秦文化的形成」『考古与文物』2008年第1期
- 梁雲 2009「從喬村殉人墓的文化歸屬看戰國時代的奴隸制」『鹿鳴集—山西省考古研究所侯馬工作站五十周年李濟陝西發掘西陰遺址八十周年紀年文集』 科学出版社
- 梁雲·侯紅偉 2014「甘肅甘谷毛家坪遺址 2013 年考古收穫」『2013 年中国重要考古發現』 文物出版社
- 林劍鳴 1988「秦趙同源新証」『河北學刊』1988年第3期
- 原典：梁雲「論早期秦文化的来源与形成」『考古學報』2017年第2期（長澤文彩訳、岸本泰緒子校）

论早期秦文化的来源与形成

梁 云（西北大学）

早期秦文化是指西周至春秋前期，或公元前 677 年秦德公居雍以前的秦文化。秦文化的很多特点是在这个时期形成的，并对后世产生了深远影响。秦文化来源问题引人关注，自二十世纪三十年代至今，已有八十年的探索历程。从目前发现的考古材料看，早期秦文化大体可分为前、后两个发展阶段，前者主要为西周中期，以清水李崖遗址为代表，其遗存可称为李崖型；后者为西周晚期至春秋早期，包括礼县西山坪、大堡子山、甘谷毛家坪，以及关

中西部的一些春秋早期遗址，其遗存可称为西山型。早期秦文化经历了从李崖型到西山型的转型。如果把秦文化作为一支考古学文化来对待，将会发现其早期遗存的文化构成主要有三个来源，即商文化、周文化和西戎文化。

On the Origins and Formation of Early Qin Culture

LIANG Yun

(Northwest University, China)

The early Qin Culture refers to the Qin Culture from the Western Zhou Dynasty to the early Spring-and-Autumn Period. Considering its cultural composition, we will realize that it has three main sources, namely the Shang, Zhou and Xirong (Western Barbarian) Cultures. The elements derived from the Shang Culture include the setting of waist pits and the custom of burying dogs in graves, the using of human victim and human sacrifice, the burial forms of chariots and horses, the Shang-style pottery wares and the tradition of constructing huge scale mausoleums. These elements reflect that the Qin people initially came from the east and had strong ties with the Shang Dynasty and were deeply influenced by the Shang Culture, and belonged to the Yin Yimin (adherents of the downfallen Shang Dynasty) in the broader sense. The elements absorbed from the Zhou Culture include the architectural types of the ancestral temples and palaces, the execution of the ritual vessel using system, the musical instrument suspension system, the Zhou-style pottery wares and the writing script features. These elements show that the Qin people learned ritual and musical culture of the Western Zhou Dynasty, which had a great realistic political significance in the early stage of Qin's history. The factors derived from the cultures of the Xirong ethnic group or the northern steppes include the flexed burial position, the gold ornaments on human bodies and chariots and horses, iron wares, animal motifs on utensils, recesses on the walls of the burial pits and the ditches around the graves, the using of the bronze cauldron and daggers. Such elements reflect that during the development process in Longyou region, the Qin people absorbed the cultures of the nearby Xirong ethnic group, the Eurasian steppes and farther beyond. The first kind of elements still occupied the superior position in the Qin Culture down to the mid Western Zhou, then the second and the third ones held preponderance from the late Western Zhou to the early Spring-and-Autumn Period, and simultaneously, the first were only shown in the aristocratic burial activities. Based on the remnant of the Shang Culture, the early Qin Culture came into being by widely absorbing elements of the Zhou and Xirong Cultures.